

安芸地方における土師質土器坏・皿類の研究（上）

永田千織・藤野次史

1. はじめに

広島県における中世土師質土器の研究は1961年に始まる福山市草戸千軒町遺跡の調査によって本格化したといつてよい。土坑などの遺構一括資料を基軸として精緻な相対編年を確立するとともに共伴する輸入陶磁器類や広域流通土器、出土木簡などの研究を通じて年代的な位置づけがなされていった。草戸千軒町遺跡の調査と研究は中世研究の進展に大きく貢献したことは今更述べるに及ばないが、土師質土器編年の確立は備後地方南部における中世研究を大きく進展させてきたといえよう。

安芸地方に目を転じると、1970年前後から徐々に中世遺跡の調査が行われるようになり、1980年以降は広島市、東広島市を中心に多くの遺跡の調査の実施とその成果の公表がなされてきた。また、1991年度から約10年間にわたって広島県教育委員会が実施した中世城館遺跡保存整備事業では、北広島町万徳院跡（田邊編1991ほか）、吉川元春館跡（小都・尾崎編1994ほか）、小倉山城跡（小都・岩本編1999ほか）など、吉川氏を中心とする毛利氏関連遺跡の調査が計画的に行われた。これにより、1995～2002年度に実施された安芸高田市（調査当時は高田郡吉田町）郡山大通院谷遺跡などの調査成果を含め、安芸地方北部の中世末の土師質土器研究は大きく進展した。このように、土師質土器を含む中世土器の資料的蓄積は進み、土師質土器については一部の時期や遺跡ごとの様相解明は大きく進展したと言える。しかし、安芸地方全体あるいは安芸地方の地域ごとの土師質土器編年研究はほとんどなされておらず、吉野健司（吉野1998）の研究を除くとほとんど論攷をあげることができない。このことは、土師質土器は地域ごとの時間的尺度や地域性を検討するための基礎資料であることから、遺跡の相互比較に基づく中世研究を困難にしている。

これまで筆者らは、広島大学東広島キャンパス農場地区遺跡群（鏡西谷遺跡、鏡東谷遺跡、鏡千人塚遺跡）を中心に、出土の中世陶磁器、瓦器、中世須恵器の再検討と資料化を行うとともに、安芸地方の関連資料を集成し、西条盆地と広島湾岸を中心に編年や地域性などについて検討してきた。本稿では、土師質土器のうち、坏および

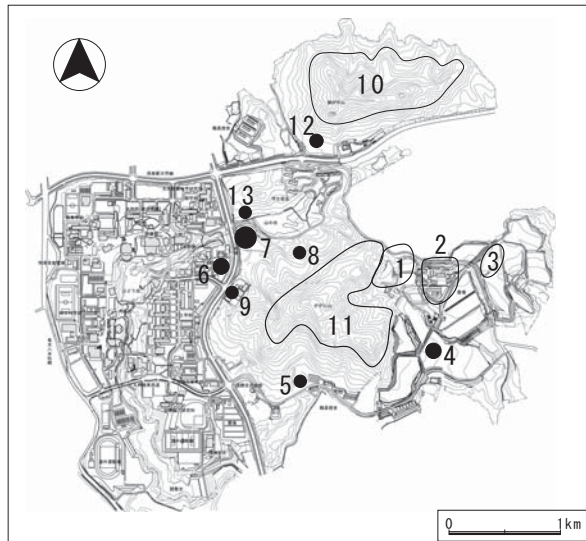
皿を取り上げて、広島大学東広島キャンパス内出土資料を集成するとともに、安芸地方出土資料のうち主要な資料を検討して、西条盆地、広島湾岸を中心に編年の問題について考えてみたい。

なお、本稿は論攷の前半部にあたり、広島大学東広島キャンパス内出土の土師質土器の集成を行って、編年的位置や組成、技術的特徴などについて検討する。

2. 広島大学東広島キャンパスにおける土師質土器杯・皿と出土状況

広島大学東広島キャンパスでは、鏡西谷遺跡（藤野・増田 2003）、鏡東谷遺跡（藤野・増田 2003）、鏡千人塚遺跡（植田・伊藤・佐々木 1982、藤野・増田 2003）、清水奥山遺跡（新谷 1982）、山中池南遺跡第 1 地点（藤野・榎林 2005）、同第 2 地点（藤野・榎林 2005）、同第 5 地点（藤野 1997）、同第 6 地点（藤野・榎林 2005）、鏡山城跡ががら地区（藤野・永田・石井・吉野編 2013）、陣ヶ平山城跡の 11 遺跡において中世の遺構・遺物を確認している。上記の遺跡のほかにも陣ヶ平地区（藤野 1985）、山中地区（藤野 1986）でも中世の遺物が出土している。これら 13 遺跡うち、陣ヶ平山城跡、

山中池南遺跡第 5 地点を除く 11 遺跡で土師質土器杯・皿が出土している。土師質土器杯・皿の大半は鏡西谷遺跡 C 地区 1 号掘立柱建物 S B 01 出土資料が占め、B 地区でも一定量がある。鏡西谷遺跡 D 地区や鏡千人塚遺跡では墳墓出土の一括資料があるが、その他の遺跡での出土量はあまり多くはない。ここでは、鏡西谷遺跡、鏡東谷遺跡、鏡千人塚遺跡、清水奥山遺跡、山中池南遺跡第 1 地点、同第 2 地点、同第 6 地点、鏡山城跡ががら地区の 9 遺跡を取り上げ、出土の土師質土器杯・皿の主要資料と出



第 1 図 広島大学東広島キャンパスの中世遺跡分布図
1. 鏡西谷遺跡、2. 鏡東谷遺跡、3. 鏡千人塚遺跡、4. 清水奥山遺跡、5. 東ガガラ遺跡、6. 山中池南遺跡第 1 地点、7. 山中池南遺跡第 2 地点、8. 山中池南遺跡第 5 地点、9. 山中池南遺跡第 6 地点、10. 陣ヶ平城跡、11. 鏡山城跡（ががら地区）、12. 陣ヶ平地区、13. 山中地区（藤野 2012 より）

土状況について紹介してみたい⁽¹⁾。

I. 鏡西谷遺跡

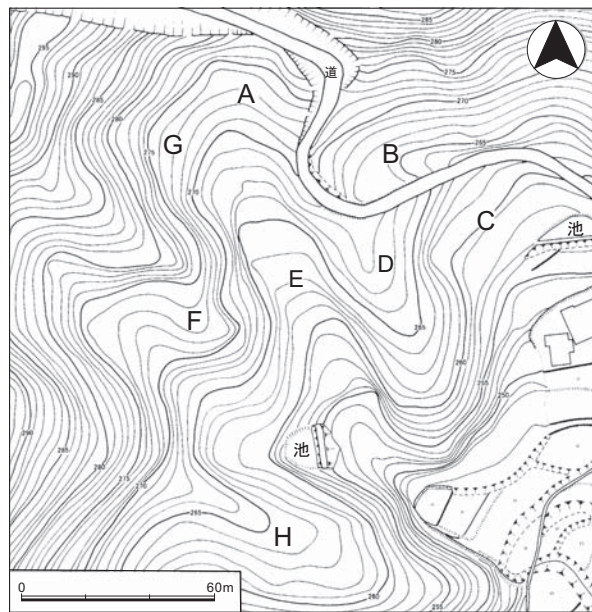
鏡西谷遺跡は広島大学東広島キャンパス東部に位置する農場地区に所在する。農場地区は、国史跡鏡山城跡南麓に広がる盆地状の地形で、北側を鏡山城跡が位置する鏡山、東西を鏡山から南側へ派生する山塊（ががら山）や丘陵によって周囲を囲まれている。鏡西谷遺跡は盆地状地形の北西端部に位置し、低丘陵部や低丘陵部に囲まれた低地部、谷部などに立地している。発掘調査は、地形などを単位に A～H 地区の 8 地区に区分して行われ、縄文時代～江戸時代の遺構・遺物が多数検出された（藤野・増田 2003）。中世については、B 地区、C 地区、D 地区、F 地区南部で、鎌倉時代、南北朝時代の遺構・遺物が検出されている。また、明確な遺構は不明であるが、E 地区でも遺物の分布状況から同時代の人々の活動を窺い知ることができる。鏡西谷遺跡では 1500 点⁽²⁾以上の土師質土器が出土しており、器形がわかるものは坏 104 点、皿 219 点である⁽³⁾。出土資料の主体は C 地区 1 号掘立柱建物 S B 01 で、その他の地区では資料数はそれほど多くないが、B 地区土器集中遺構 S X 02 や D 地区 2 号土坑 S K 06、2 号土壙墓 S K 07 など一括資料が認められる。

1) A 地区

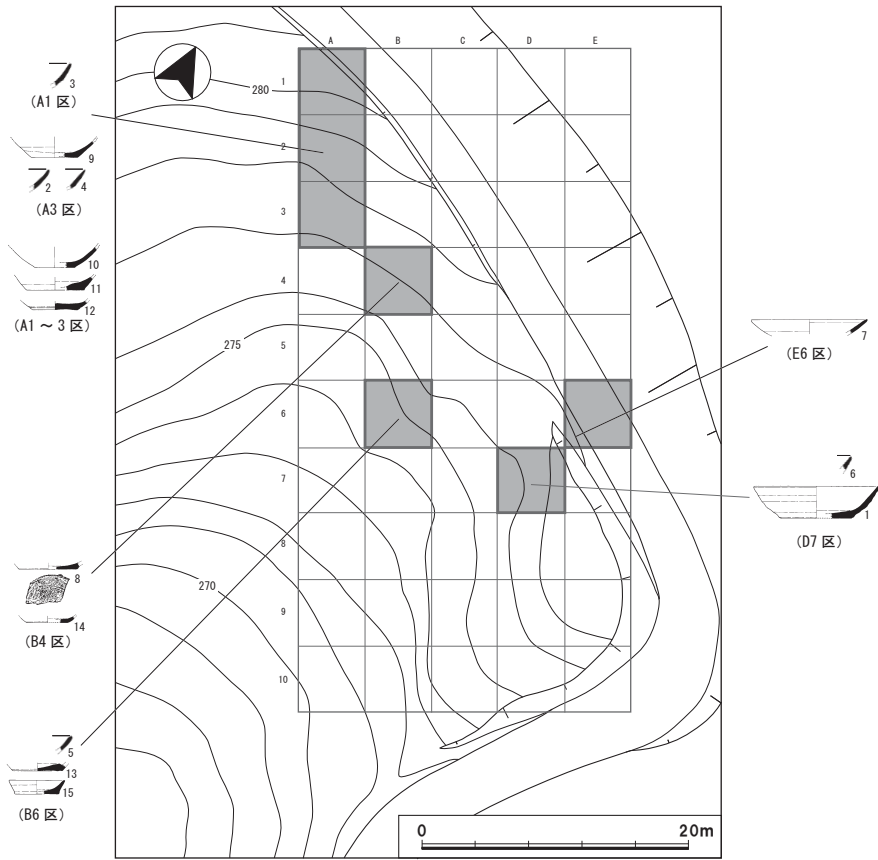
A 地区は鏡西谷遺跡の北西部に位置し、南東に延びる丘陵部と南西丘陵斜面で構成されている。南西に G 地区が位置し、二つの地区の間は埋没谷となっている。中世の遺構は検出されていないが、南西斜面から埋没谷部を中心に北東部の谷裾部などからも土師質土器が出土した。土師質土器坏・皿類は 20 点あり、坏 9 点、皿 5 点、皿もしくは坏 6 点である（第 4 図）。

坏（第 4 図 1～6、8～13）

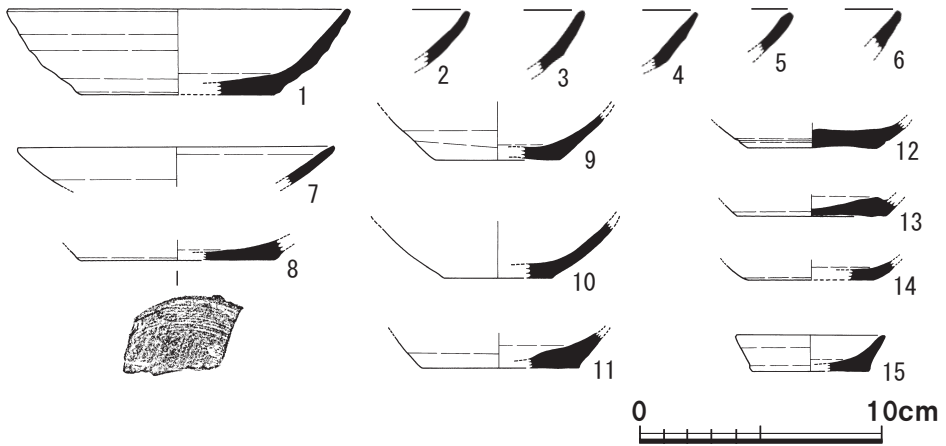
1 は、口径 14cm、底径 7.9cm、器高 3.5cm である。体部は内



第 2 図 鏡西谷遺跡の地形と調査区
(永田・藤野 2009)



第3図 鏡西谷遺跡 A 地区の土師質土器杯・皿出土状況



第4図 鏡西谷遺跡 A 地区出土土師質土器杯・皿実測図

彎し、口縁端部は丸く収めている。2～4も坏と考えられる口縁部である。2・3はやや内彎し口縁端部を丸く収めるが、4は直線的で口縁端部は先細りとなっている。5・6は坏の可能性があるが、残りが少なく、断定はできない。5は口縁端部内面がやや強く押さえている。6は外面に回転ナデ痕が見られ、端部は先細りである。8～13は坏と考えられる底部である。いずれもおおむね底径は5～6cmほどであるが、8は8cmとやや大きく、底面中心付近にナデ調整が施されている。10は内面塗彩で、体部が内彎する。12は底部外面にヘラケズリ状の痕跡が見られる。

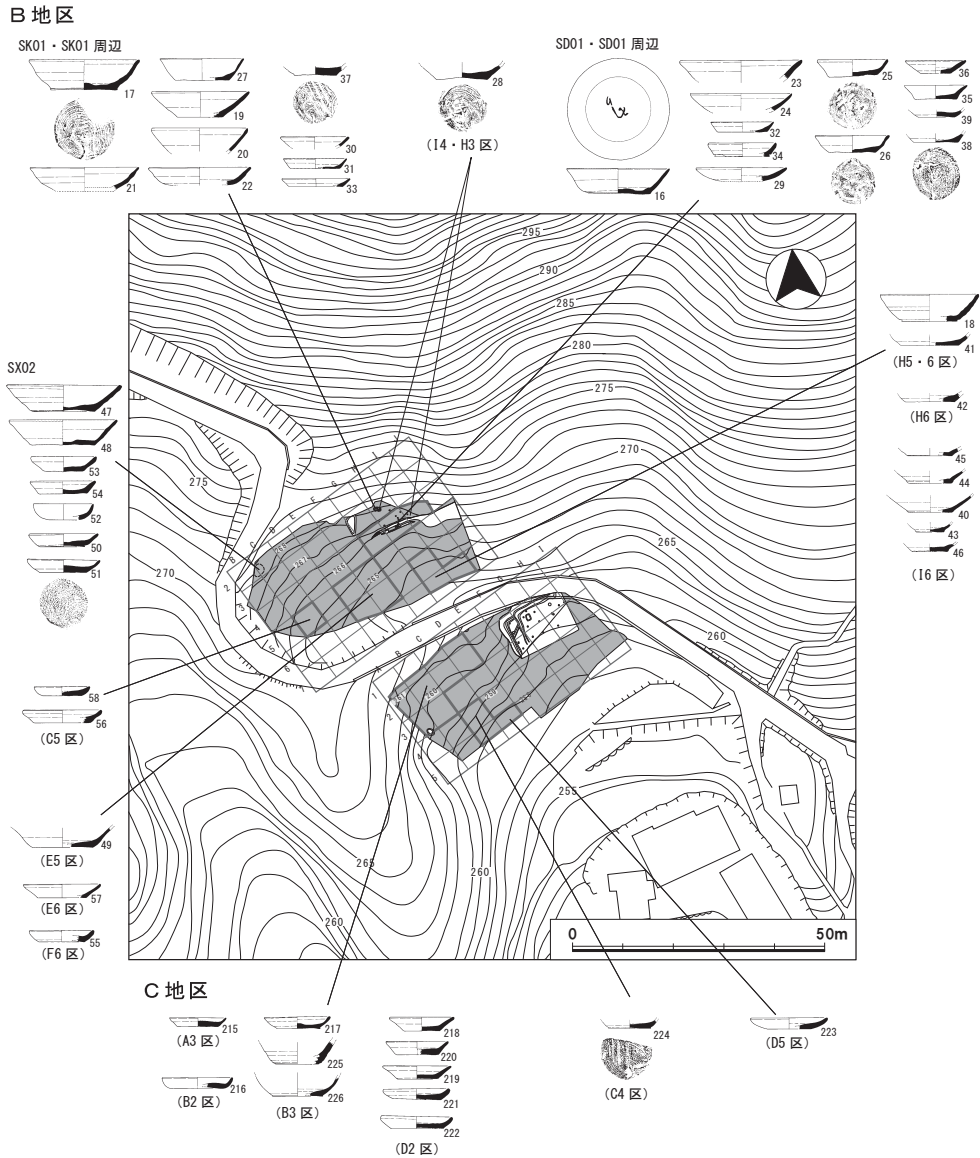
皿（第4図7・14・15）7は直線的な口縁部で、推定口径12.8cmと大きいものの、口縁部があまり立ち上がり皿の可能性はある。14は皿と考えられる底部である。15は口縁部から体部にかけて外彎し、端部は先細りである。内外に赤色塗彩が施されている。

器種別の分布状況を見ると、坏は北西谷斜面で6点、南東部谷裾で3点出土し、皿は北西部谷斜面で6点、南東部谷裾で2点出土している（第3図）。

2) B地区

B地区は鏡西谷遺跡の東北部に位置しており、鏡山南麓裾の緩斜面に立地している。北側は鏡山南麓の急斜面が迫っており、東西を低丘陵に囲まれ、南側に開けた地形である。調査時には調査区南端を東広島市道が敷設されており、C地区と隔てられていたが、本来はC地区と同一地形面である。調査区北端部に検出遺構は集中しており、調査区北東部で、溝1条（SD 01）、土壙墓1基（SK 01）、土坑1基（SK 02）、柱穴状ピット群（SX 01）と平坦面、調査区北西端部で平坦面と土師質土器集中部（SX 02）が検出されている。溝をはじめとする調査区北東部の遺構群は14世紀後半～15世紀初頭（南北朝時代）を中心とする時期に、調査区北西端部の遺構群は13世紀前葉（鎌倉時代前期）を中心とする時期に位置づけられる（永田・藤野 2009）。

B地区出土の土師質土器は調査区北半部を中心に出土した（第5図）。調査区東半部からは122点の土師質土器坏・皿が出土している。122点のうち86点が調査区北東部に分布しており、SD 01溝、SK 01土壙墓およびその周辺に集中している。SK 02土坑周辺では10点ほどが出土した。調査区東半部では、この他にSD 01の南側にあたる調査区南東部で43点の土師質土器が出土している。調査区西半部では125点の土師質土器が出土した。調査区北西端部平坦面で34点、調査区南西端部で33点、調査区西南部中央付近で38点出土しており、出土位置不明の資料が20点ある。調査の際の排土から回収した資料をあわせると、B地点出土の土師質土器は277点となるが、小破片が多い。以下、調査区東半部と西半部に分けて、主要な土師



第5図 鏡西谷遺跡B地区・C地区の土師質土器坏・皿出土状況
 (北側がB地区、南側がC地区である。各地区の灰色部分が調査範囲を示している。)

質土器坏・皿を提示する。

調査区東半部では、SD01およびその周辺(第6図16~18・21~39)から多くの資料が出土し、SK01(第6図17)、SD01南側の調査区南東部(第6図18・40~46)などから出土している。

坏(第6図16~21・23・24・27・28・40・41) おおむね口径12~13cm程度であり、

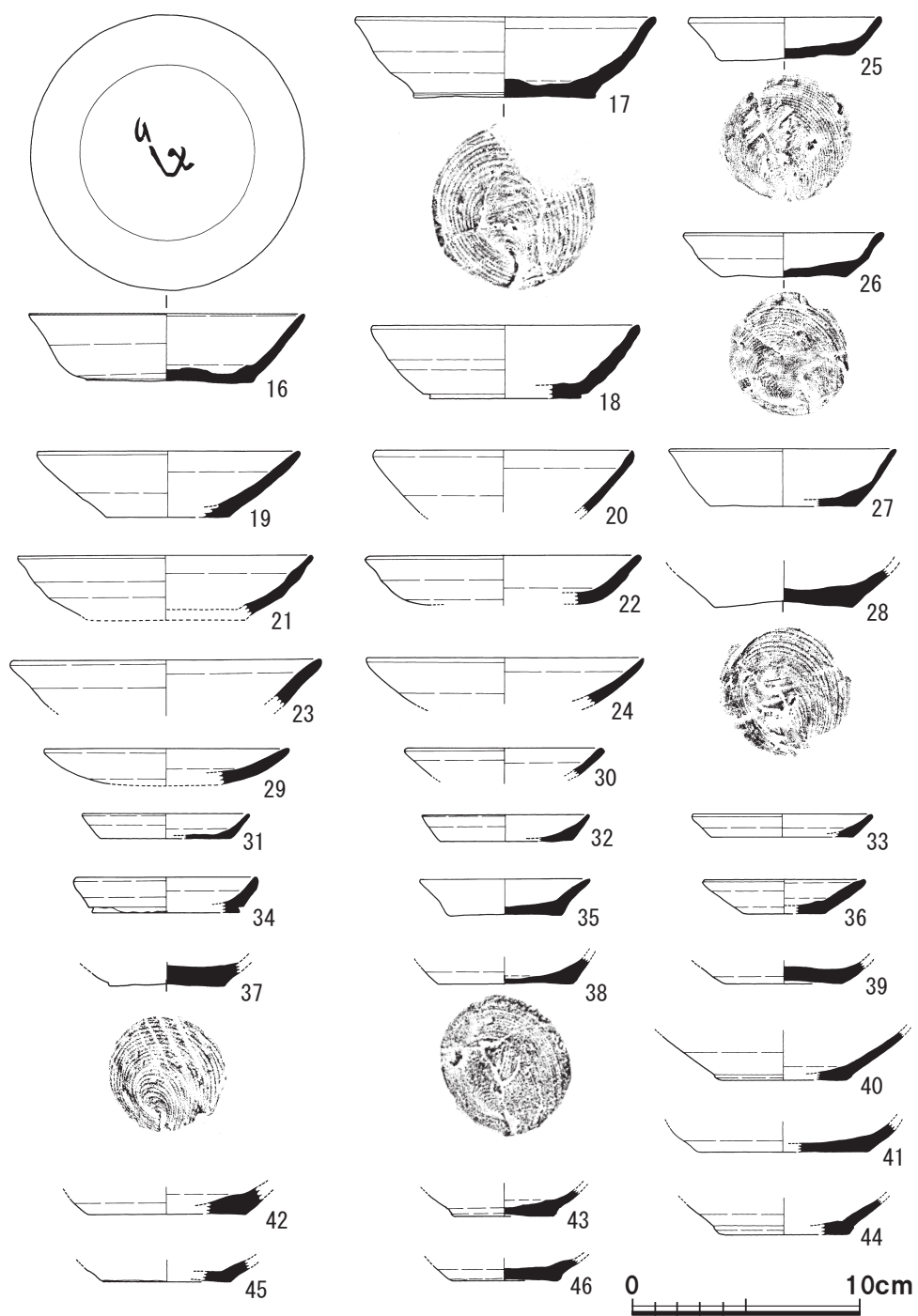
口径が 10cm 程度の小型ものが含まれている。口縁端部はいずれも基本的に丸く収めている。16 は、口径 12cm、器高 2.9cm である。口縁部から体部にかけて直線的で、外方に開く。内面見込みには拭き取り痕が認められ、墨書が残されている（報文では、「五つ」か、とされている）。17・18 は内彎する体部をもつ。17 は口径 13.1cm とやや大きく、器高 3.5cm で口縁部は外彎して端部は丸くおさめている。底部は板目圧痕みられる。18 は口径 11.8cm で、外面には凹凸が見られる。19・20 は直線的で開く器形である。19 は口径 13.2cm、器高 3.5cm で、口縁部は外彎して端部は丸く収めている。底面には板目圧痕が見られる。21 は内彎する器形である。23 は外彎気味、24 はやや内彎気味の口縁部で、いずれも浅い形態と思われる。24 は口径 12.2cm の薄手の口縁部で、わずかに内彎する。27 は口径約 10cm の小型品で、底部から体部下半はわずかに内彎し、体部から口縁部にかけては直線気味に開いている。40・41 は坏と思われる底部である。

皿（第 6 図 22・25・26・29～36） 皿は口径が 10cm ほどのもの（22・29）と 8cm 以上のもの（25・26・30）、7cm 前後のもの（31～36）がある。底径は 36 が 3.6cm、その他は 5～6cm である。22 は内彎し、口径が 12cm と大きい、器高が約 2cm と浅く、皿としておく。25 は口径 8.4cm、26 は口径 8.8cm で、内面見込みには拭き取りナデ、底面には板目圧痕が見られる。35 は外彎する皿で、36 は直線的に開く皿である。36 は底径が小さい。口縁端部内面は抑えられている。31～33 はいずれも薄手で、器高が 1cm 前後と低いタイプの皿である。34 は口径 7.8cm で、口縁端部は尖り気味である。底部と体部の境には段が見られる。

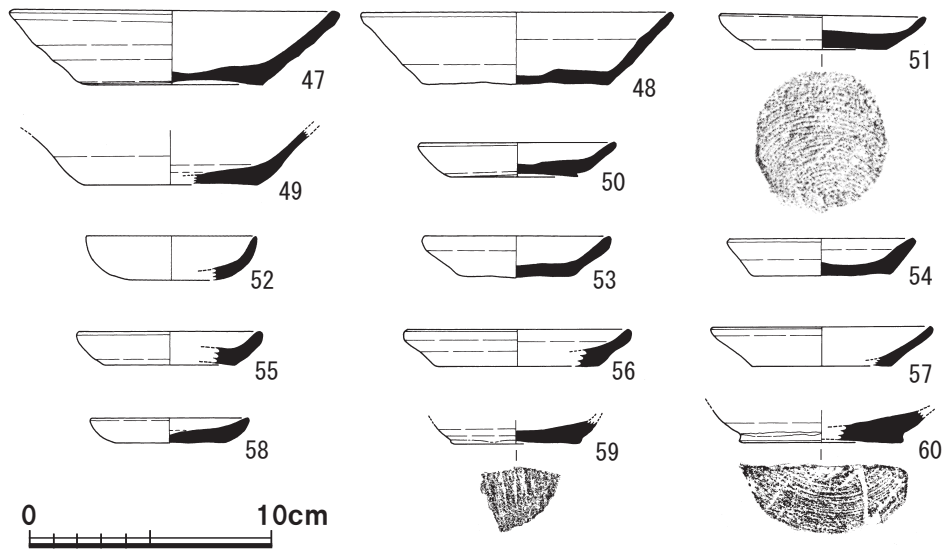
坏または皿（第 6 図 37～39・42～46） いずれも底部であるが、残存が少なく、器種が断定できない。37 は厚手の底部で、底面に板目圧痕が見られる。38 底部が薄く、底面中心部に板目圧痕がみられ、底面外周にはナデ調整を行うなど、丁寧な作りである。39 は切り離し後に底面外周にナデを施している。42～46 はいずれも底部の小破片で、46 は小型の坏の可能性もある。

調査区西半部では、北西部では、S X 02（第 7 図 47・48・50・51・54）を中心に出土している。調査区西南部（第 7 図 49・55～59）でも多くの出土があり、出土区画を特定できない資料（60）も一定量ある。

坏（第 7 図 47～49・60） 47・48 はいずれも口縁部から体部にかけて直線的に開く器形である。口縁端部は丸く収めている。47 は口径 13.5cm、底径 7.3cm、器高 3.0cm、48 は口径 12.9cm、底径 7.6cm、器高 3.0cm である。49 は外方に開く体部であるが、



第6図 鏡西谷遺跡B地区東半部出土土師質土器杯・皿実測図



第7図 鏡西谷遺跡B地区西半部出土土師質土器・皿実測図

中ほどで屈曲する。底径7.1cmで、47・48と同サイズの坏と思われる。60は坏と考えられる底部である。底部は切り離し後の調整は行われず、外縁に粘土の飛び出しが残る。底面には板目圧痕が見られる。

皿（第7図50～59）50は口径7.8cm、51は口径8.4cmで、底部の厚さに比べて口縁部が薄い。51の底面には板目圧痕が見られる。52は体部で強く内彎して体部へとつづく。53は面取り状に口縁端部が垂直な面を形成しており、54は口縁端部を丸く収めている。口径はいずれも7cm前後であるが、器形はそれぞれ異なっている。52～54はSX02南側隣接部から出土しており、SX02に関連する資料の可能性がある。南西部出土の皿（55～59）のうち、56・57は口径が9cm前後とやや大きめである。55は体部に丸みがあり、56は外方に開く形態で、体部がやや屈曲する。57は薄手で、直線的に開くが、口縁部はわずかに内彎している。58は小型で、体部は丸みをもつ。59は皿と考えられる底部で、底面に板目圧痕が見られる。

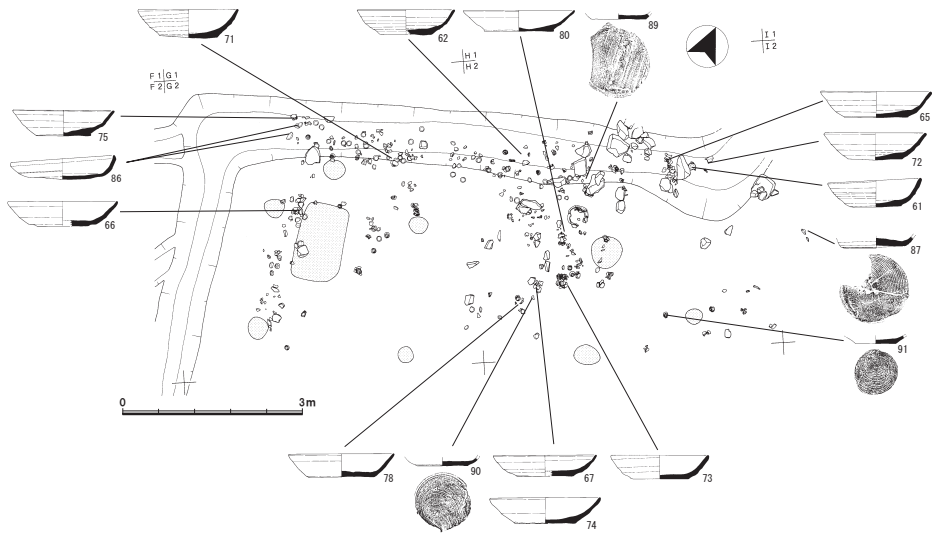
B地区全体で見ると、坏は直線的に開く器形（16・19・20・27・47・48）と内彎する器形の器形（17・18・21）が確認できる。直線的に開くタイプについて見ると、調査区西半部出土資料は口径13cm前後であるのに対して、東半部出土資料は10cmおよび11～12cmと一回り小さい形態が出土している。皿はおおむね口径7～8cm前後で、器高が1.5cm以下のものが最も多く、口径9～10cm、器高1.5cm前後の法量もわずかに見られる（29・56・57）。25・26は口径8cmほどであるが、器高が2cm

近くあり、やや深めである。皿は器形にバリエーションがあり、直線的で外方に開くもの(30・32～34・51・54)、内彎するもの(25・50・52・55・58)、外彎するもの(35)などがある。26は直線的な部分と外彎する部分があり、27は口縁部が外彎し、内面は体部と口縁部の境でくの字状になる。端部の始末についても先細りのものや丸く収めるもの、面取り状のものなどさまざまである。

3) C 地区

C地区は鏡西谷遺跡の東部に位置しており、B地区の南側隣接地である。B地区同様に南側へ向かって緩やかに傾斜する地形であるが、その傾斜は一層緩やかである。調査区の南端部で段が形成され、一段下がって平坦な地形が南側に広がっていた(一段低い平坦地には民家が位置していた)。調査区の西側はD地区が立地する低丘陵で、南側へ向かって平坦面が延び、東側も同様な低丘陵が南側に延びていた。調査区北西部は西側のD地区の丘陵から派生するようにやや高まった地形で、その東端部を掘り込んで1号掘立柱建物(SB01)が構築されていた。SB01は東西3間、南北2間の総柱建物で、北側及び東側を溝2条(SD01・02)がめぐっている。SB01の北部には土坑1基(SK01)が構築されていた。SB01からは青磁、東播系須恵器、土師質土器、石鍋、鉄製鎌などの遺物が良好な形で出土しており、13世紀前葉(鎌倉時代前期)を中心とする時期に位置づけられる(永田・藤野2009)。また、調査区東半部では中世に位置づけられる遺構は検出されていないが、青磁、備前焼、土師質土器など、13世紀～15世紀代の遺物が一定量分布していた(永田・藤野2009)。

C地区からは1150点の土師質土器坏・皿が出土している⁽⁴⁾。955点がSB01から出土しており、9割以上がSB01からの出土である。出土遺物はSB01北半部中央のG2区およびH2区西半を中心に分布しており、とくにG2区中央部のSK01周辺、SK01北側の1号溝SD01付近、H2区北西部に集中している(第8図)。土師質土器坏・皿についても、800点以上がG2区およびH2区から出土しており、遺物全体の分布状況と基本的に一致している。SB01南半部では、H3区で73点、I3区で12点が出土しており、遺物分布の中心の一つであるH2区の南側隣接地であるH3区で一定量が出土している。また、SB01南側に隣接したG～I4区で20点ほど出土があり、SB01からの流出遺物を中心とされていると見られる。さらに、その南側のF5区、G5区、H5区、H・I-5区で少量(14点)の出土が認められた。基本的にはSB01から流出したものと想定されるが、付近ではSB01とは異なる時期の陶磁器が出土していることから、坏・皿についても異なる時期の資料が含まれている可能性もある。



第8図 鏡西谷遺跡C地区SB01の土師質土器坏および遺物出土状況

また、調査区北西部でも坏・皿あわせて20点の土師質土器が出土しており、わずかながら調査区西北部にも分布している（第5図）。

C地区出土の土師質土器坏・皿のうち、器種が特定できるものは皿がほとんどであるが、坏も一定量認められる⁽⁵⁾。ここでは、出土資料の大半であるSB01を中心に資料を説明し、C地区北西部の資料についても補足的に提示する。まず、SB01出土の坏・皿について示す（第9～12図）。

坏（第9・10図）61・62・70・71・73・77は口径13cm前後、63・64・67～69・72・73・75・78・79・81～83・86は口径14cm前後、65・66・74・80は口径15cm、84・85は12cm前後である。61・62は内彎する体部を持ち、ともに外面の凹凸が顕著である。63～73も内彎する体部を持ち、63～66・68・71～79は器高が3cm以上、67・69・70・80・81は3cm未満である。71～73に比べて、74～81は比較的直線的に開く器形の坏である。76・81は体部と底部の境に丸みをもつが、ほかは直線的に立ちあがっている。80・81は器高が低い。82・83は口縁部～体部で、82は体部が底部寄りて屈曲し、弱い稜をなしている。83も同様と思われる。84は口径12.4cm、器高3.4cm、85は口径11.3cm、器高3.5cmで、器高は深めだが、口径が小さい形態である。85は非常に器壁が薄く、精緻な胎土をもち、内外に赤色塗彩が施されている。86は他の出土坏と形態や調整が異なり、京都系と推定されるものである。口径14.0cm、底径10.0cm、器高3.3cmの法量をもつ。口縁端部は面取りを行い、口縁部

は回転ナデ、底部はナデおよびユビオサエ調整が施されている。87～91は坏の底部である。87～88・90は体部との境が内彎し、89・91は直線的につづくと考えられる。87は底面にヘラ状工具によるものと思われる調整痕が見られる。

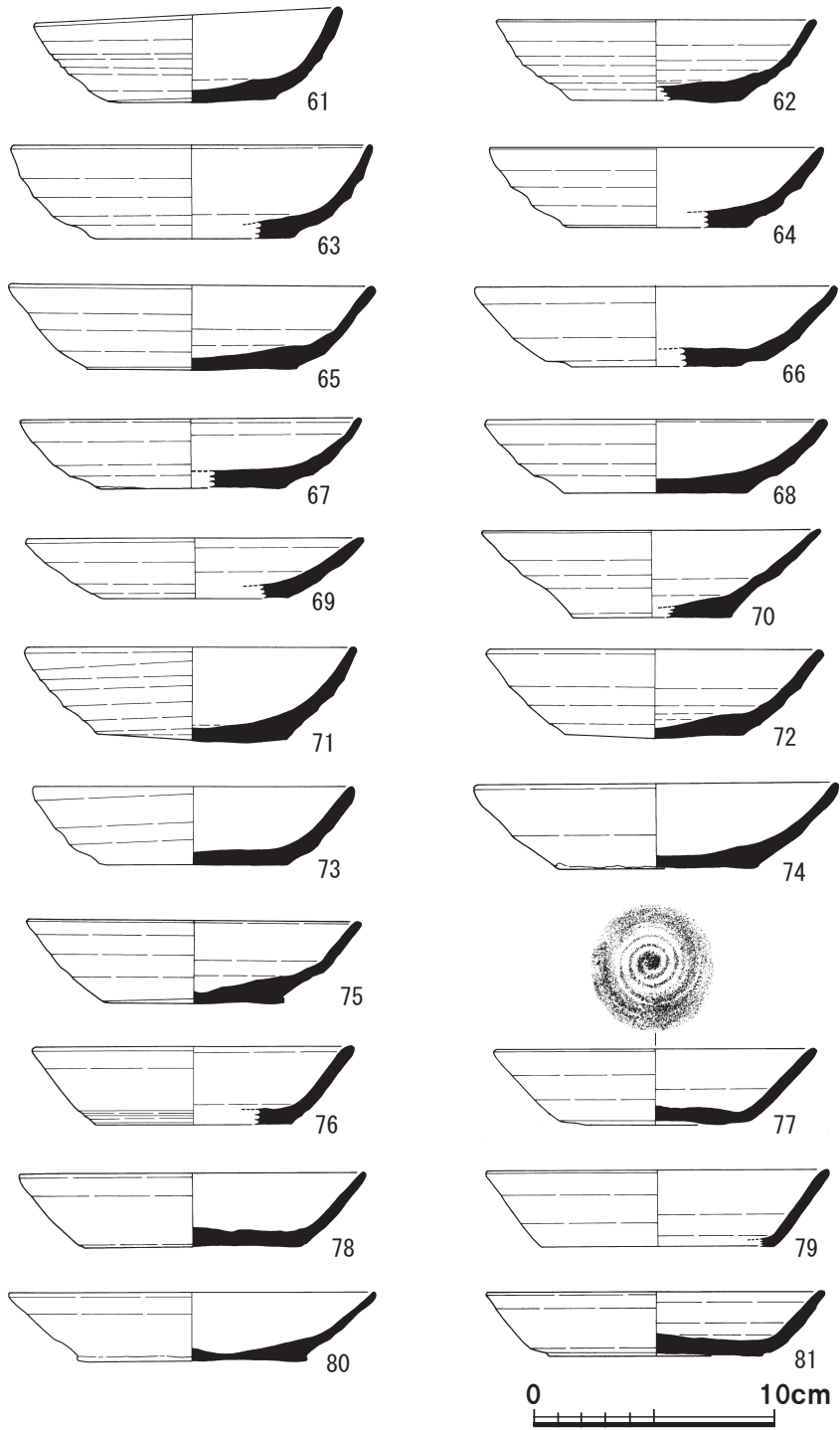
坏の調整について注目しておく、78・81・87・90は内面に回転ナデ調整後の拭き取り痕が見られる。また77・88は内面見込みに渦巻状の回転ナデ痕がみられ、特徴的である。75・88・89は底面（底部外面）に板目圧痕が見られる。75・88は浅い板目であるのに対し、89は顕著な圧痕である。88は底面にさらにナデ調整を加えている。67は底部外面の周囲を部分的にナデ調整している。

皿（第11・12図） 129点中102点は口径が7～8cm前後であるが、95・115・164・202などは口径9.0cm前後とやや大きい。器高はほとんどが1.5cm前後であるが、93・185・189・197は器高が2cm近くある。体部から口縁部の形態について見ると、内彎する形態で、口縁端部を丸く収めるもの（92～142）、直線的に開く形態（143～157）、外彎する形態（158～192）、内彎し、口縁端部が丸く、先端を尖らすことを意識している形態（193～211）の4種類に分類される。直線的に開く形態では部分的に丸みを帯びているものもある。内彎するもの・直線的なものどちらも口縁端部は丸く収めるが、口縁部が体部とほぼ厚さが変わらないもの、膨らみをもつもの、先細りになるものなどが見られる。外彎する形態のうち、168～192は口縁端部が垂直に立ち上がり、面をもつものである。これらは胎土が特徴的で、赤褐色を呈するものである。中には面を作りきれていないもの（177・182・188・189）や、外彎せず直線的なもの（169・175・179など）も見られる。193～211についても、口縁部が膨らみをもつもの（193～206）、先細り気味のもの（207・208）、厚さが一定で面をもつものに近いもの（209～211）などが見られる。212～214は他の皿と胎土や形態が異なり、京都系の皿と思われる。底部と体部の境界が不明瞭で全体に丸みを帯びている。212は口縁端部を面取りしているが、やや丸みをもっている。213・214は口縁端部を丸く収めており、底面はナデ調整を行っているが、ひび割れが見られる。

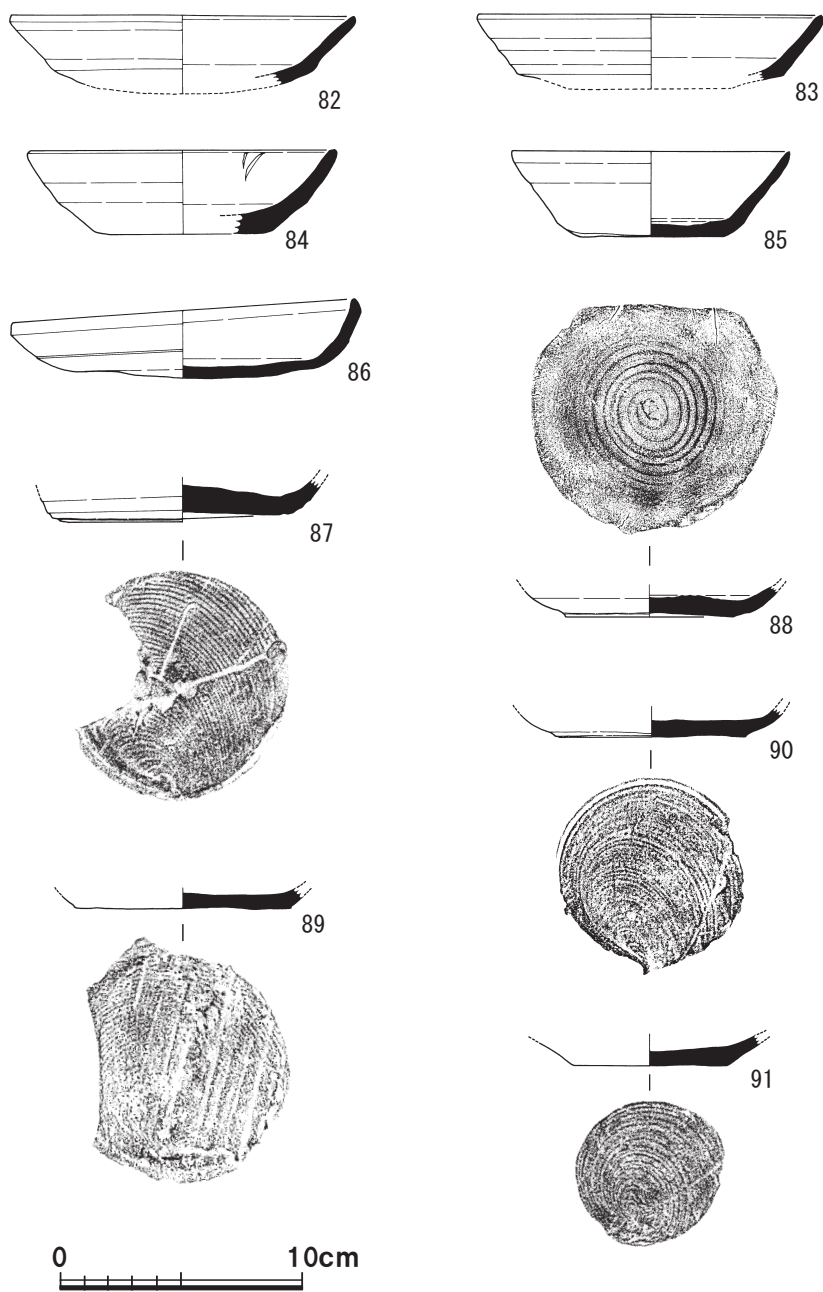
次に、調査区西半部の坏・皿についてみておく。

坏（第13図225・226） 225・226は西北部出土である。225は器壁が厚く、外面には凹凸が明瞭に見られる。226は内彎して立ちがある。

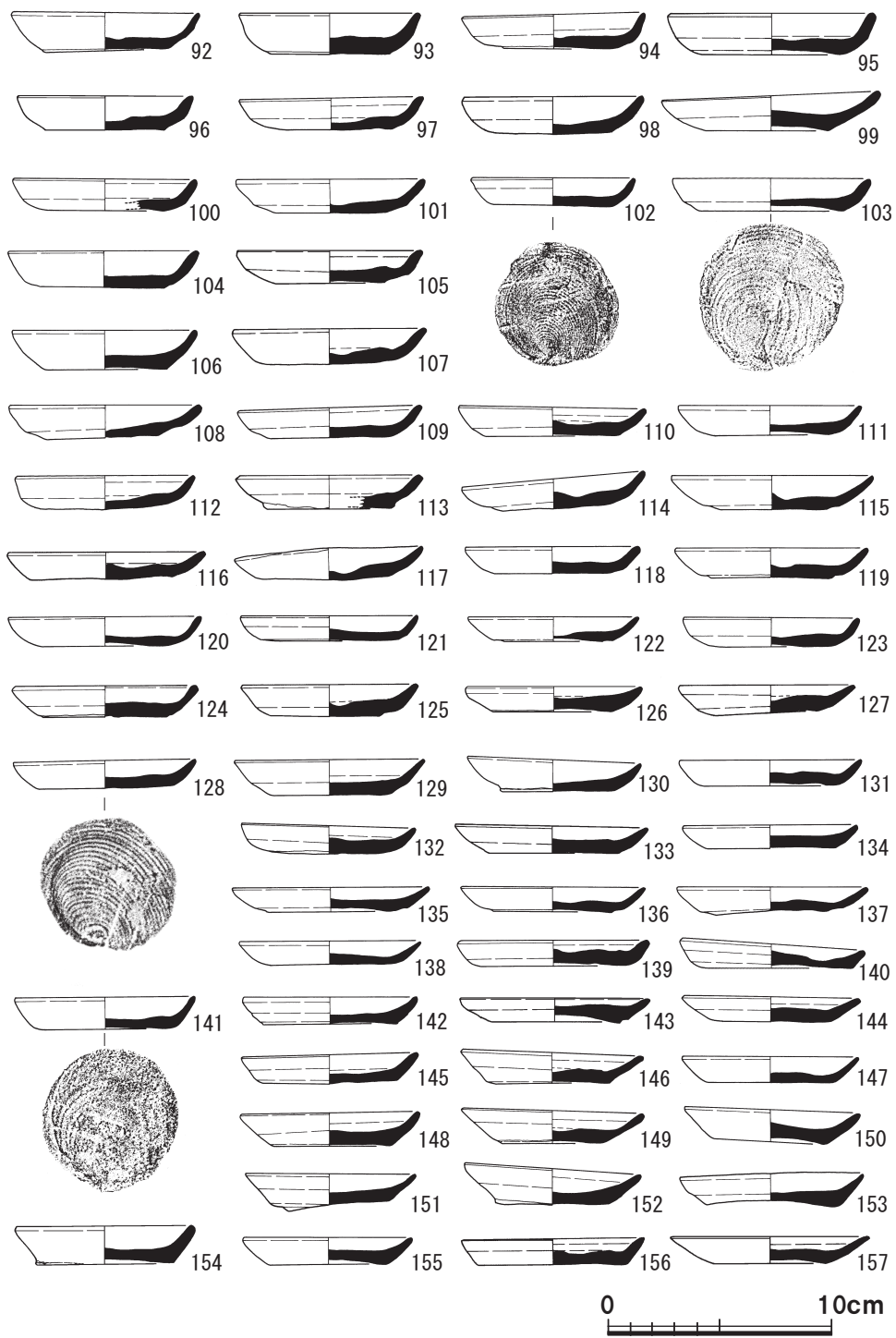
皿（第13図215～224） 215～222は西北部、223・224は西南部から出土した。体部～口縁部が直線的に開くもの（215）、外彎するもの（218・219・220）、内彎するもの（216・217・221・222・223）がある。215・220は口径7cm前後と非常に小型で、



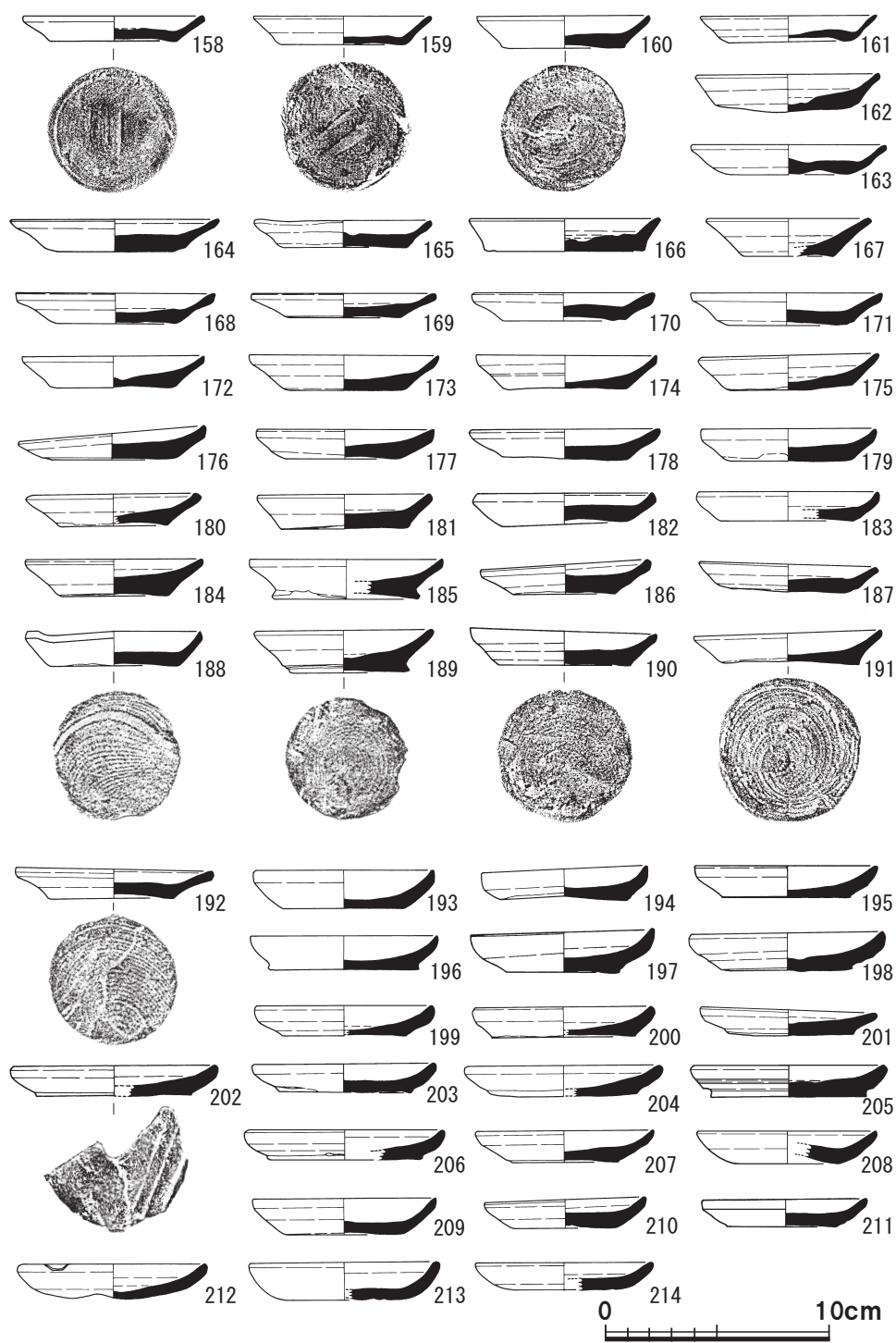
第9図 鏡西谷遺跡C地区SB01出土土師質土器坏実測図(1)



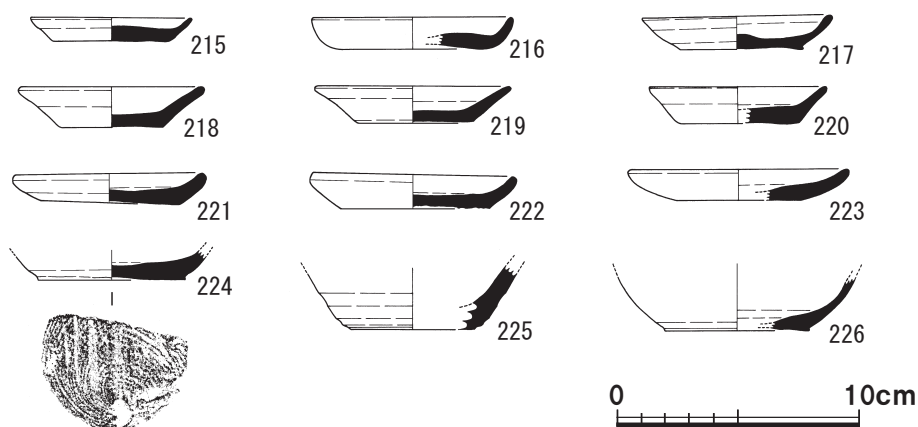
第10図 鏡西谷遺跡C地区S B 01出土土師質土器坏実測図(2)



第11図 鏡西谷遺跡C地区SB01出土土師質土器皿実測図(1)



第12図 鏡西谷遺跡C地区SB 01出土土師質土器皿実測図(2)



第 13 図 鏡西谷遺跡 C 地区北西部出土土師質土器坏・皿実測図

215 はきわめて浅い。皿の多く (216 ~ 222) は口径 8cm 前後で、223 は口径 10cm とやや大きい。218 と 224 は底面に板目圧痕が見られる。

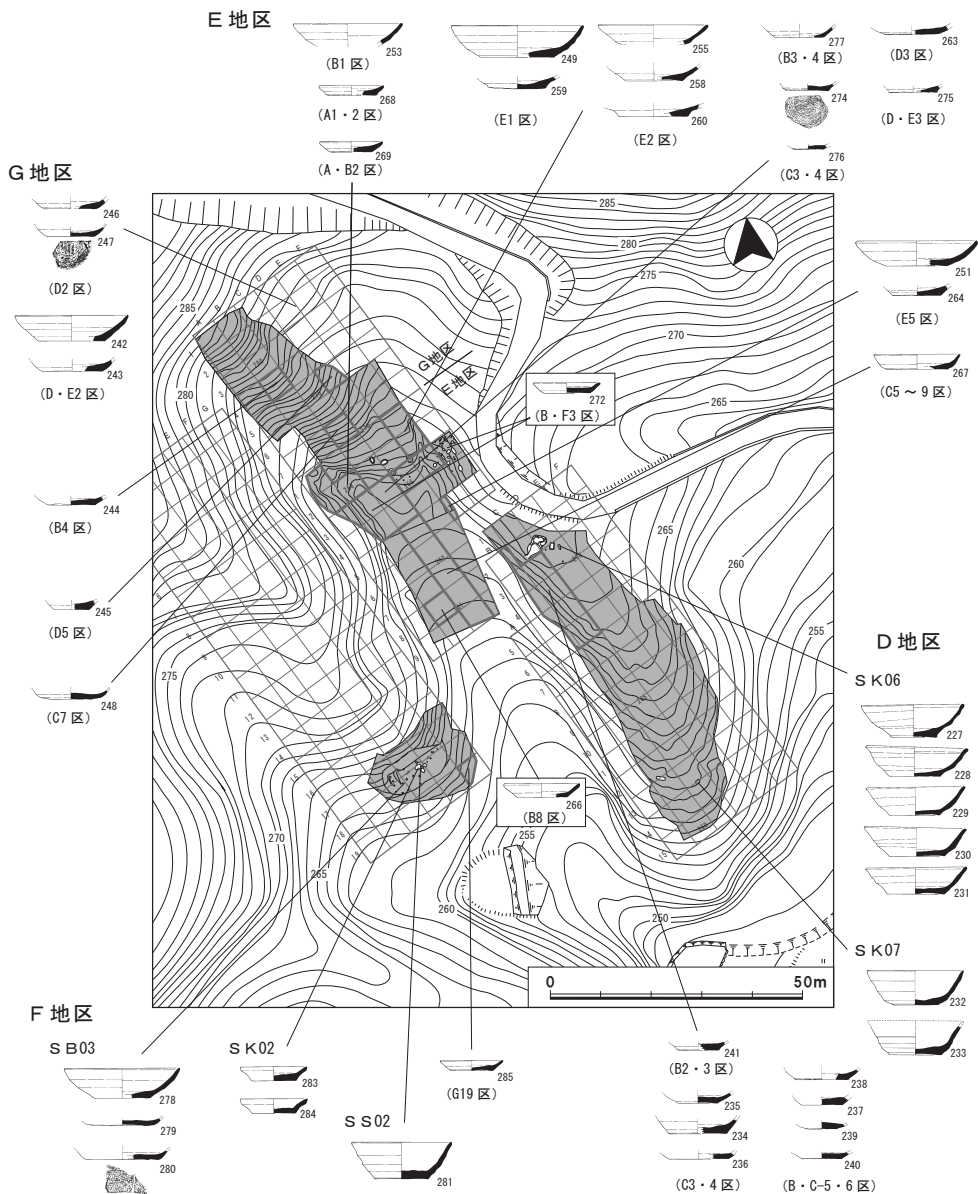
4) D 地区

D 地区は鏡西谷遺跡のほぼ中央に位置し、C 地区の西側に隣接する。南に延びる低丘陵で、丘陵頂上部は幅 15 m 前後の細長い平坦面が広がっている。D 地区では C 地区に前後する鎌倉時代の遺構が調査区北端部と調査区南端部に集中して構築されており、北端部は土壙墓 1 基 (S K 05)、土坑 1 基 (S K 06)、竪穴遺構 1 基 (S B 04) が、南端部には土壙墓 2 基 (S K 07・08) が近接して位置している。S K 07 からは瓦器塚が 2 点出土しており、この他にも B2・3 区から瓦器小片が 1 点出土している。塚と思われる体部である。

土師質土器は 15 点出土し、S K 06、S B 04 南西部付近および S K 07 から出土した。ここでは遺構出土資料を中心にしてみる。

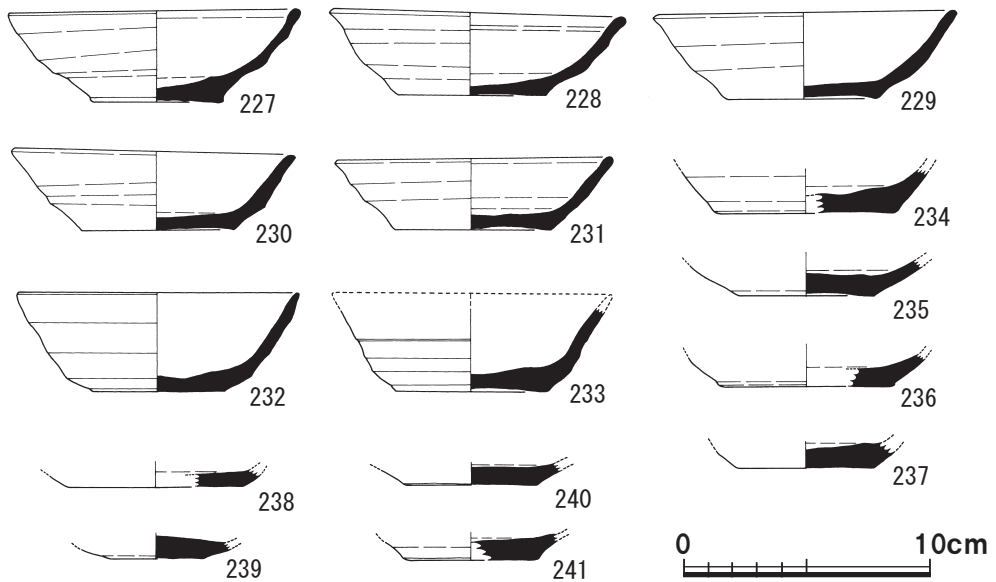
S K 06 出土土師質土器 (第 15 図 227 ~ 231) 5 点出土しており、いずれも坏である。遺構配置や出土状況から見て、1 号土壙墓に伴う共献土器と考えられる。227 ~ 229 は内彎する体部をもち、口縁部は外彎して端部は丸く収めている。外面には凹凸が明瞭に見られる。230 は体部下半がナゲによって窪むものの、本来は直線的な器形と思われる。231 は底部付近がやや彎曲するものの、直線的に開く器形である。

出土の坏はいずれも口径 12cm 程度、底径 6cm 前後、器高 3cm 程度であるが、227 は底径が 5.3cm と小さいのに対して器高はほかのものよりやや高く、塚に近い器形である。胎土の色調は 227 は赤系で、ほかの 4 点は白系 (赤色塗彩) であり、土坑内の



第 14 図 鏡西谷遺跡 D 地区、G・E 地区、F 地区の土師質土器・皿出土土状況
 (東側が D 地区、中央が G・E 区、西側が F 地区である。各地区の灰色部分が調査範囲を示している。)

遺物配置とも対応している (第 16 図)。228～231 の坏は土坑内の南側に接して出土している。230・231 は底部を上にもうけて伏せた状態で出土し、228 は 230 と口縁部を接するように下部に置かれていた。230 のすぐ南に 229 が、口縁部を上にして置かれ



第 15 図 鏡西谷遺跡 D 地区出土土師質土器坏・皿実測図
 (227～231. S K 06、232・233. S K 07、234～241. S B 04 南西)

ていた。これら 4 点は白い胎土に赤色塗彩した坏である。227 は土坑の北側から出土し、底部を上にして伏せた状態で出土した。他の 4 点とは 15cm ほど離れている。227 は胎土の赤い土器で、器形も他の 4 点とは異なっており、土器の色を意識した配置と考えられる。ちなみに、後述の S K 07 出土坏 (232・233) も墓壙内から口縁部を下にして伏せた状態で出土している。

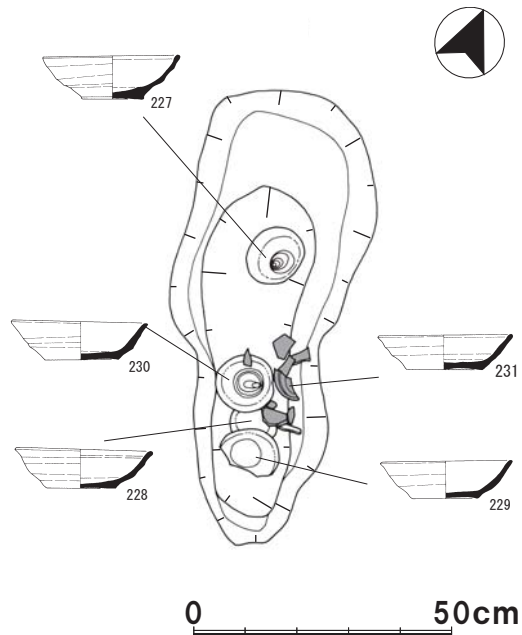
S K 07 出土土師質土器 (第 15 図 232・233) 2 点の坏が出土しており、副葬品と考えられる。232 は口径 11.3cm、底径 5.4cm、器高 3.9cm である。口縁部は直線的で体部は緩やかに内彎する。233 は口縁端部を欠くが、緩やかに外彎するもので、232 とほぼ同じ法量に復元される。

このほかに S B 04 南西側斜面から坏・皿類が出土した (第 15 図 234～241)。234～236 は坏、237 は皿、238～241 は器種不明である。いずれも小破片で、全形を窺えるものはないが、234・235 は内彎する体部をもつものと思われる。235 は底面に板目圧痕が見られる。

5) G・E 地区

G・E 地区は鏡西谷遺跡北西部に位置する。東側の A・D 地区と西側の F 地区に挟まれた山麓斜面、丘陵斜面および谷部である。調査の際、便宜的に北半の南東山

麓急斜面および裾部などをG地区、南半の谷部をE地区としているが、連続した地形面である。G・E地区境界付近の丘陵裾部で時期不明の土坑4基（SK 07～10）、A地区丘陵部の西裾にあたるE地区東北部で柱穴群、土坑などの遺構が検出されているが、明確に中世に位置づけられる遺構は検出されていない。中世の遺物は、E区北半部を中心に中世（前期）の遺物が広く分布し、G地区でも点々と出土している。E地区は北部を中心に白磁碗や同安窯系青磁碗・皿、龍泉窯系青磁碗I類、瓦器、東播系須恵器、亀山焼などが出土しており、G地区でも備前焼、東播系須恵器、亀山焼などが少量出土した。

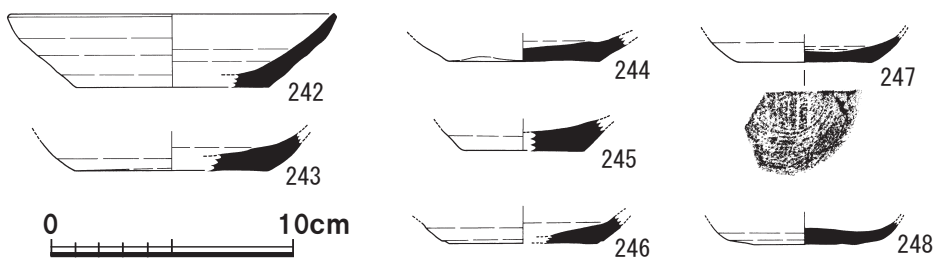


第16図 鏡西谷遺跡D地区SK 06 土師質土器出土状況
(231は灰色の破片が接合したものである。)

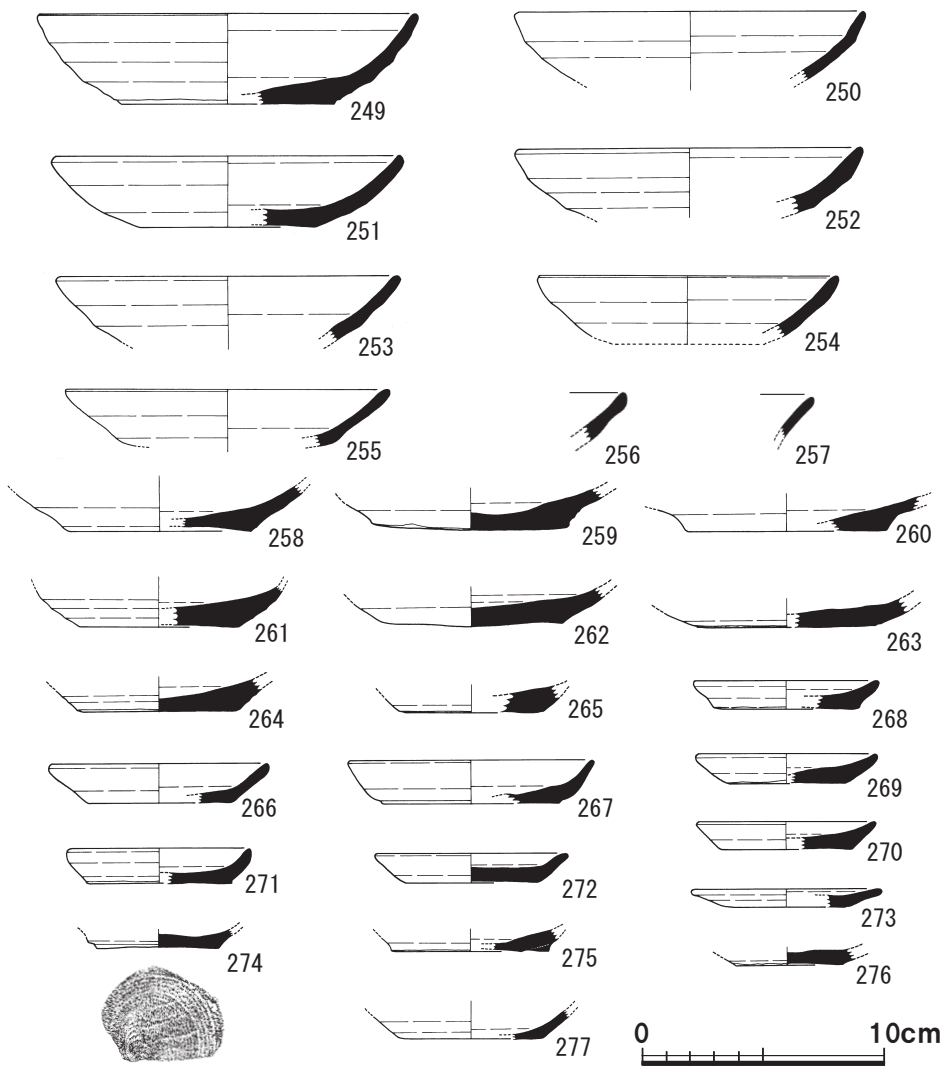
土師質土器もE地区を主体に出土しており、G地区ではきわめて散発的に出土しているに過ぎない（第14図）。G地区では7点が出土した。そのうち4点は試掘の際に出土したものである。E地区では29点が出土しており、調査区北半部に18点が分布する。散漫な分布状況であり、グリッド単位で見ると1～2点ずつとなる。南半部からは8点出土したが、詳細な出土位置が分からないものが6点あり、南半部東端のE5区で2点出土した。このほか、出土地点不明が3点（坏）ある。E地区の分布状況は基本的に中世陶磁器の分布とほぼ一致しているといえる。

G地区出土の土師質土器は、坏3点、皿3点、器種不明1点である（第17図）。器種不明の1点は底部の小破片である（248）。

坏（第17図242～244） 242は体部は直線的に開き、口縁部はわずかに内彎する。口縁端部は丸く収めているが先細りである。口径13.2cm、器高3.0cmである。底面には板ナデがみられ、残存部が少ないため断定はできないが、底面全体に施されている可能性がある。



第 17 図 鏡西谷遺跡 G 地区出土土師質土器坏・皿実測図



第 18 図 鏡西谷遺跡 E 地区出土土師質土器坏・皿実測図

皿（第 17 図 246～248） 246 は底部の小破片であり、247 には底面に板目圧痕が見られる。248 は底面に糸切り後にナデ調整が行われている。

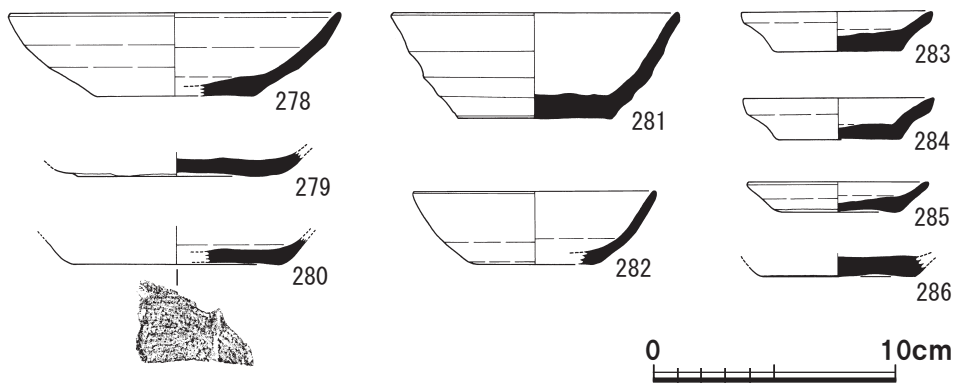
E 地区出土の土師質土器は、坏 16 点、皿 9 点、器種不明 4 点である。器形や法量が検討できるものは少ない。器種不明の資料はいずれも底部である（274～277）。

坏（第 18 図 249～264） 口径は 15cm 程度（249・250）、13cm 前後（251～253・255）の 2 種類の法量があり、底径は 7～8cm のものがほとんどである。249 は口径 14.8cm、底径 7.8cm、器高 3.6cm で、内彎する体部を持ち、外面には凹凸が見られる。250 は体部上半～口縁部で、おそらく 249 と同様の形態と思われる。251 は口径 14.0cm、器高 2.9cm である。内彎する体部を持ち、口縁端部はやや強く押さえられ、先端が尖り気味である。精緻な胎土をもち、焼成も非常に良い。252～255 は体部上半～口縁部で、破片のため不確定であるが、口径はおおむね 13cm 前後になると思われる。いずれも口縁部と体部の境がナデによって窪んでおり、口縁端部は丸く収めている。254 は胎土・調整等が 251 とよく似ている。256・257 は口縁部の小片で、256 は坏と考えられるが 257 は断定できない。258～264 は底部～体部下部分である。全形を窺えるものはないが、体部がわずかに内彎する形態（258・259・261）が主体と思われる。

皿（第 18 図 265～274） 皿は口径 7～8cm、底径 5cm 前後のもの（268～273）が多く、器高 1.0～1.2cm を主とするが、273 は器高 0.7cm 程度と小型で浅い。一方、267 は口径が 10cm 近く、底径も 7cm 前後とやや大きい。

6) F 地区

F 地区は鏡西谷遺跡の西部に位置し、G・E 地区の南西に隣接する調査区である。

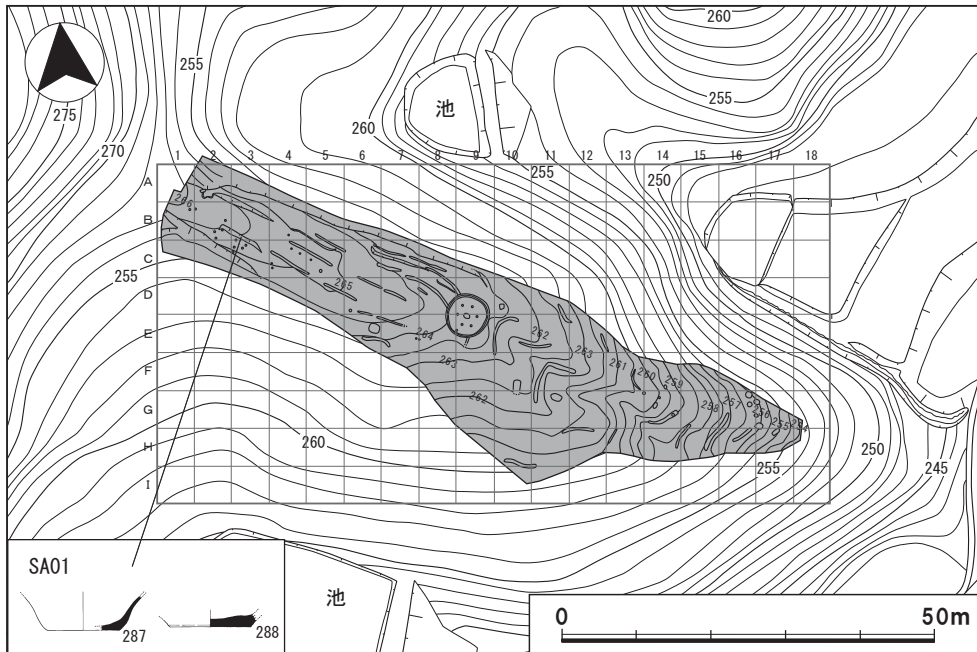


第 19 図 鏡西谷遺跡 F 地区出土土師質土器坏・皿実測図

北西から南東に延びる幅の狭い丘陵で、調査区北西端部および南東端部を除くと、丘陵頂上部は比較的傾斜が急である。調査区南東端部の丘陵裾部では、鎌倉時代の1号掘立柱建物S B 03、2号積石塚S S 02、1号・2号土壙墓S K 01・02が構築されており、調査区北西部を中心に室町時代の郭、溝、柵状遺構などが検出された。土師質土器のほか、S B 03からは瓦器碗が1点出土している⁽⁶⁾。土師質土器は土鍋が調査区北西部で出土したほかは、大半が調査区南東端の遺構群出土である。坏・皿類は、坏6点、皿3点、器種不明1点で、ほとんどが調査区南東端部出土である(第14図)。

坏(第19図278～282・286) 278～280はS B 03、281はS S 02出土である。278は口径13.4cm・器高3.4cm、底径6.5cmで、内彎した体部をもつ。279・280は底部で、底径は約8cmである。280の底面には板目圧痕が見られる。281は、口径11.8cm、底径6.3cm、器高4.3cmで、わずかに内彎するが、直線的に開く器形である。282は体部が内彎し、口径9.8cmとやや小型である。286は坏と思われる底部である。

皿(第19図283～285) 283・284はS K 02、285は調査区南東端部である。283・284はいずれも口径7.7cm、底径は5cm程度である。体部が外彎し、口縁端部は面取り状に直立する。285は283・284に比べると薄手である。外彎し、口縁端部は丸く

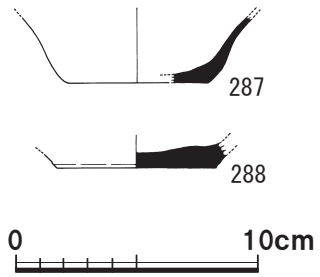


第20図 鏡西谷遺跡H地区の土師質土器坏・皿出土状況

収めている。

7) H 地区

H 地区は鏡西谷遺跡の南端部に位置し、D・E・F 区の南にあたる。東南東に延びる丘陵平坦部および東側斜面を中心とする調査区である。中世の遺構は丘陵平坦部西半に分布し、1号～6号平坦面 S X 02～07、1号柵状遺構 S A 01 など検出された。



第 21 図 鏡西谷遺跡 H 地区

土師質土器は S A 01 周辺で少量の坏（第 21 図 287・288）が出土した。287 は体部と底部の境が丸みを持ち、体部上半は外彎している。288 は底部破片である。

出土土師質土器坏・皿実測図

II. 鏡東谷遺跡

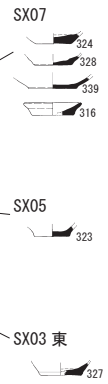
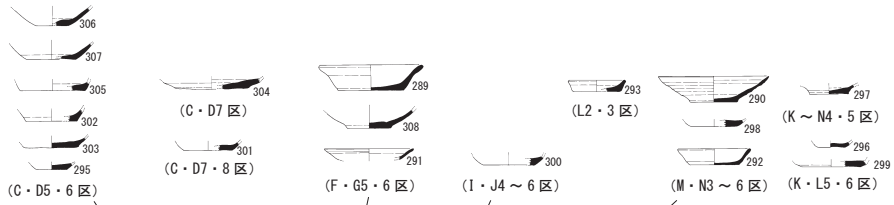
鏡東谷遺跡は鏡西谷遺跡の東に隣接しており、鏡西谷遺跡とは幅 80 m の小規模な谷によって隔てられている。鏡山城跡郭群の南側に隣接して位置し、低丘陵上に立地する。平坦で広い丘陵地を東西を画するように中央部に小規模な谷地形が位置し、2本の低丘陵（西丘陵、東丘陵）が南へ延びている。両丘陵は北端部でひとつながりとなり、連続した平坦面を形成している。西丘陵は東丘陵に比較して南北に短く、ほぼ平坦な丘陵平坦部を形成しており、南端は急斜面を形成して南側の水田へと移行していた。東丘陵は南北に細長い平坦面を有する。北端部は西丘陵平坦面とほぼ同じ標高で、一連の平坦部を形成する。北端部を除くと、南に向かって緩やかに傾斜している。調査では数段の広い平坦面を確認したが、面的な調査が実施できたのは丘陵北端部と南半分である。東西丘陵の南側に尾根筋が延びており、主として水田として利用されていたが、南北に細長い平坦面を複数段形成していたと想定される。

発掘調査は 1982 年に実施し、西丘陵・東丘陵北端部（北地区）、東丘陵南半部（南地区）で中世の遺構・遺物が検出された（藤野・増田 2003）。北地区では近世の遺構が主体で、明確な中世の遺構は検出されていないが、調査区東半部および調査区西端部の埋没谷を中心に土師質土器が出土した（第 22 図）。南地区では室町時代の遺構・遺物が多数検出され、調査区北部を中心に土師質土器が出土した。

1) 北地区

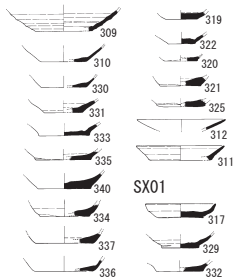
調査以前に民家が位置しており、調査区西部と東部は約 2 m の比高差をもって段状の平坦面が造成されていた。造成の時期は明らかにできなかったが、中世の時期に造成された平坦面を利用していた可能性もある。明確な中世の遺構は検出されなかった

北地区



南地区

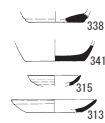
SX01・02



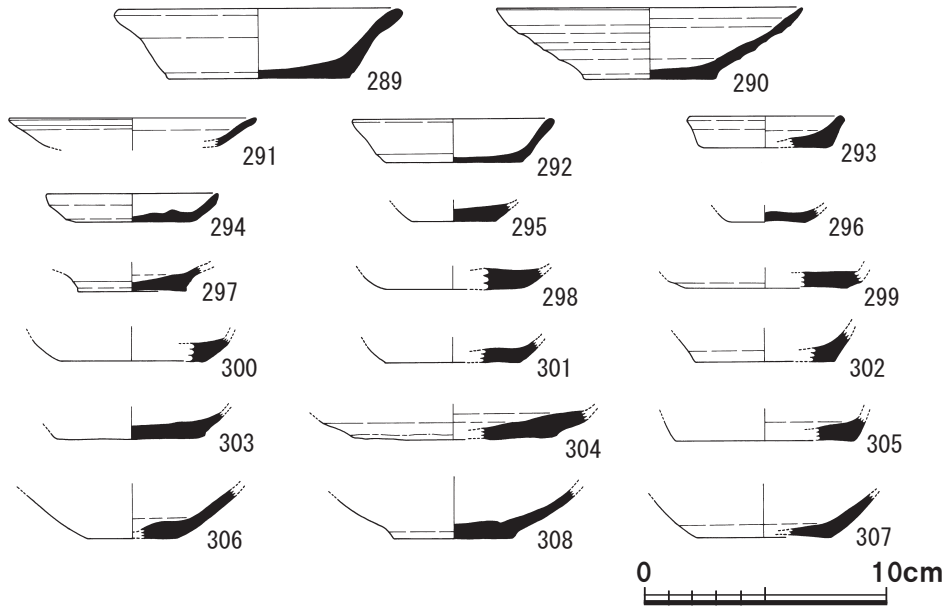
SX06



SX04 南側



第 22 図 鏡東谷遺跡（北地区・南地区）の土師質土器杯・皿出土状況
（北西側が北地区、南東側が南地区である。各地区の灰色部分が調査範囲を示している。）



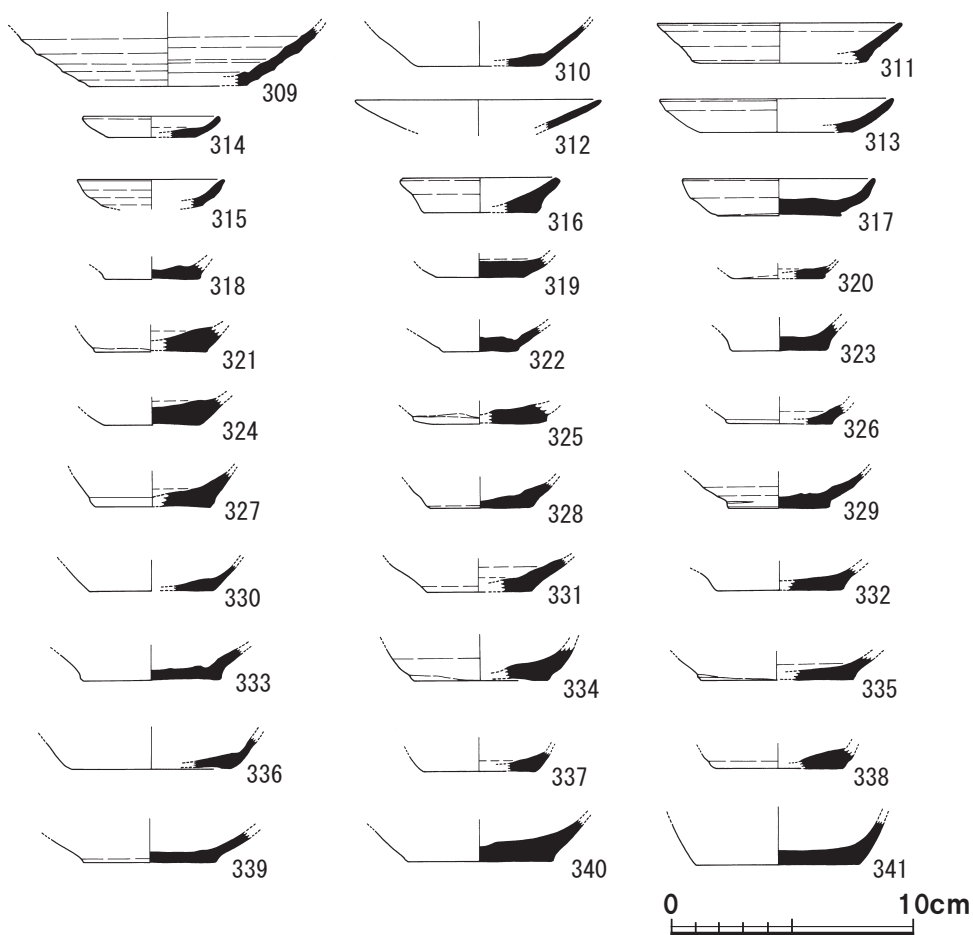
第 23 図 鏡東谷遺跡北地区出土土師質土器坏・皿実測図

が、調査区西端部の埋積谷埋土内から近世・近代の遺物に混じって中世の遺物が多数出土している。また、調査区東部を中心に全域で中世の遺物が散漫に出土している。土師質土器も中世遺物の分布と基本的には同様の状況で、41 点出土した。調査区西端の埋積谷（第 23 図 294・295、301～307）を主として出土している。その他では、調査区西部（第 23 図 289・291・308）、東部（第 23 図 290・292・293・296～300）ともに調査区南側を中心としている。ほとんどが破片で、器種が断定できない資料が多い。

坏（第 23 図 289・290・303～308） 289 は口径 11.4cm、底径 7.4cm、器高 2.8cm で口縁部と体部の境で強く外彎する。290 は口径 12.5cm、底径 5.4cm、器高 2.9cm で、口径に対して底径が小さい。直線線的に開き、薄手の作りである。外面には回転ナデによる稜線が見られる。303～308 は底部破片である。304 の 8.3cm から 306 の 3.6cm まで底径はさまざまである。303・304・306 は底面外周に糸切り後にナデ調整を行っている。

皿（第 23 図 291～296） 291 は外彎する口縁部で、口径は 10.0cm である。292 は口径 8.2cm、底径 5.6cm、器高 1.8cm で、口縁部はわずかに外彎する。293・294 は器高 1.2cm、295・296 は底部で底径 3.0cm ほどである。

坏または皿（第 23 図 297～302） 297 は底径 4.4cm と小さいが、290 とよく似た



第 24 図 鏡東谷遺跡南地区出土土師質土器坏・皿実測図

作りであり、坏の底部の可能性が高い。底面には板目圧痕が見られる。298～302は底部を主体とする小破片である。

2) 南地区

南地区には幅 15～20 m 程度の細長い丘陵平坦面を中心に調査区全域に中世遺構が分布し、郭状遺構 6 ヶ所（S X 01～06）、掘立柱建物跡 3 棟（SB03～05）、溝 3 条（SD01～03）、池状遺構 1 ヶ所（S X 07）などが検出されている。出土遺物は調査区北半部を中心にほぼ全域から出土している。土師質土器は 45 点出土した（第 24 図）。遺構検出以前に大半の遺物が出土したことから、遺構との関連を明確にすることのできる遺物は多くないが、主に郭状遺構周辺および調査区南端部に分布する。遺構との関連が推定で

きるものは、S X 01 (317・329・332・334・337)、S X 04 南側 (313・315・338・341)、S X 06 (314・318・326)、S X 05 (323)、S X 03 東側 (327)、S X 07 (316・324・328・339) などがあり、S X 01 南側～S X 02 北側でも出土している (309～312・319～322・325・330・331・333～336・340)。全体の器形が窺える資料はわずかである。

坏 (第 24 図 309・340・341) 309 は口縁部を欠くが、口径 13cm 程度と推定される。340・341 は坏の底部である可能性がある。

皿 (第 24 図 314～317) 口径 9～10cm 程度で、311 は外彎、312 は直線的、313 は内彎する。314～317 はいずれも口径 5～6cm である。314 は器高が 1cm 未満と低い。315・316 は口径 6cm ほどで、315 は内彎し、外面には回転ナデ痕が見られる。317 は口径 7.7cm、器高 1.5cm で、外彎する器形で、口縁端部は先細りである。

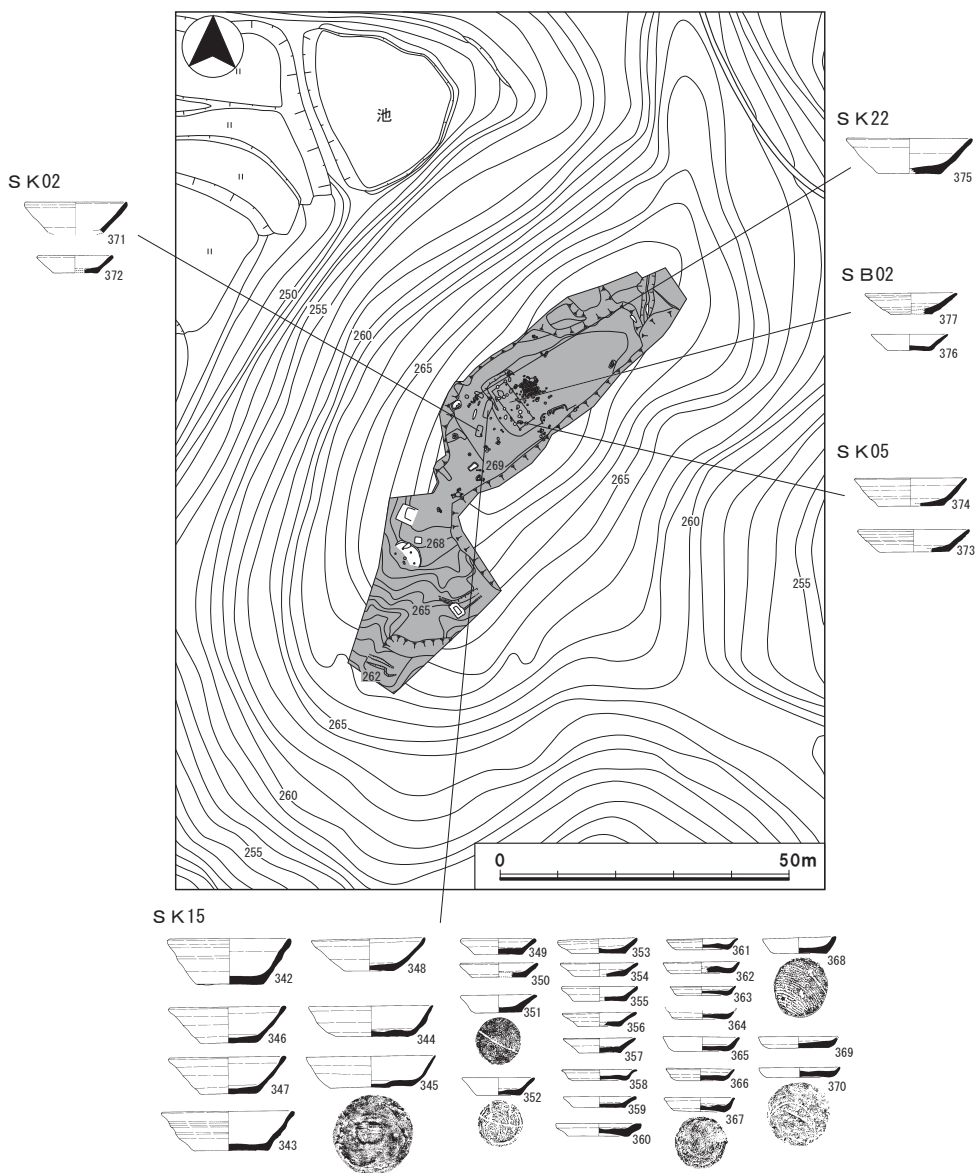
坏または皿 (第 24 図 318～339) いずれも底部である。322 は底径 3.1cm と小さく、その他は底径 4～5cm のもの (318～321・323・324・327～329・333)、底径 5cm 以上のもの (325・326・330・332～339) がある。また底部が厚いものと薄いものがある。

Ⅲ. 鏡千人塚遺跡

鏡東谷遺跡の東側約 200 m に位置し、鏡山から南へ延びる丘陵頂部に立地している。鏡山との間に鞍部を形成しており、独立丘陵状を呈している。1980 年に広島県教育委員会 (植田・伊藤・佐々木 1982)、1981 年に広島大学埋蔵文化財調査委員会が発掘調査を実施し (藤野・増田 2003)、中世を主体とする遺構・遺物が検出された。中世の遺構は、掘立柱建物跡 1 棟 (SB02)、土壙墓 23 基 (SK02～08・10～24・26)、積石塚 4 基 (S S 01～04) などが検出された⁽⁷⁾。

土師質土器は、S K 02・15・22 土壙墓、S K 05 土坑、S B 02 掘立柱建物跡および S K 04・17 土壙墓周辺から出土しており (第 25 図)、墳墓の副葬品を中心とする。とくに、土壙墓 S K 15 から 29 点がまとまって出土した (第 26 図 342～370)。土師質土器は敷石上を主体に出土しており、木棺の痕跡から棺内を中心に、棺外にも副葬されている。出土状況はいくつかのまとまりを指摘できるが、いずれも北半部 (遺体の足元側) である。

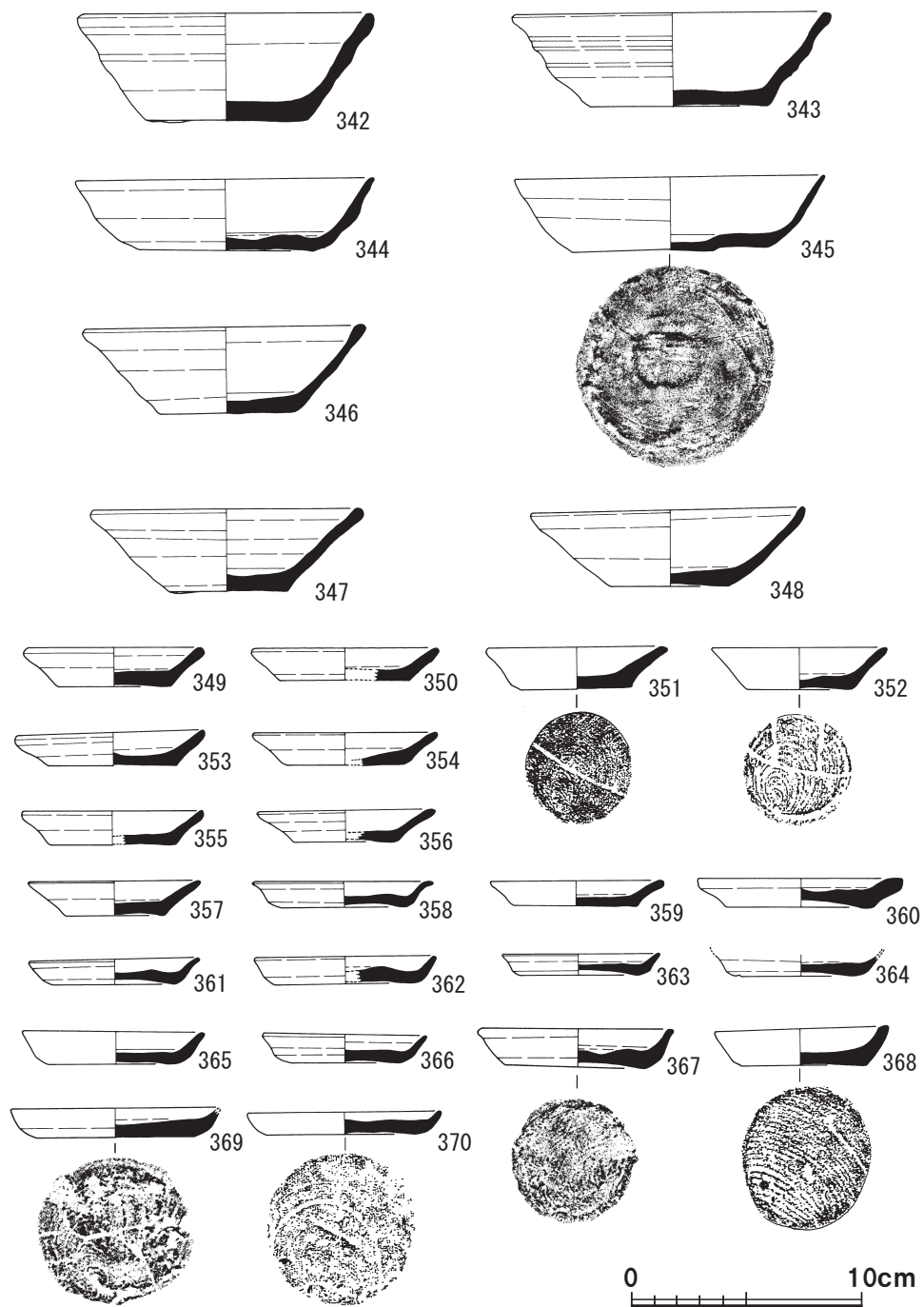
坏 (第 26 図 342～348) 342 は口径 12.3cm、器高 4.5cm、343 は口径 13.5cm、器高 4.0cm である。ともに外面に凹凸を残し、直線的に広がる器形であるが、342 は器高がやや高い。343 は糸切り後に底面外周ほぼすべてにナデ調整が行われている。344・345 はやや内彎する器形の坏である。器壁が薄く、口縁端部は先細りとなっている。344 は口径 12.7cm、345 は口径 13.3cm で、器高は 3cm 程度である。345 の底面には糸切り



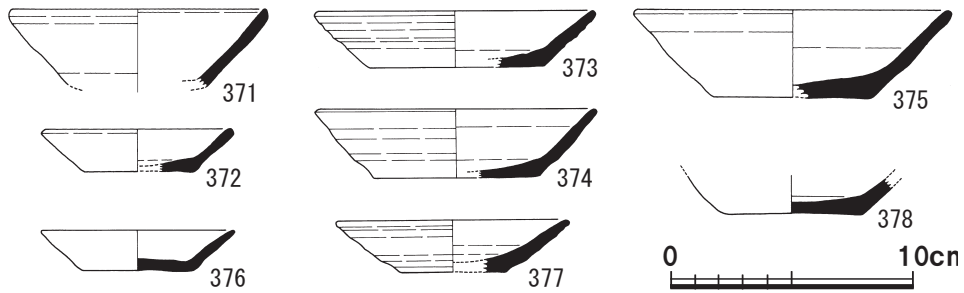
第 25 図 鏡千人塚遺跡の土師質土器・皿出土状況

後に板状工具によるなでつけ痕が見られる。346～348は口径12.0cm以下で342・343より一回り小さい。346・347は口縁部が直線的であるが、348は立ちあがる。

皿（第26図349～370） 皿は、いずれも口径7～8cm程度であるが、器高が1cm程度のもものと1.5～2cm程度のものがある。ほとんどが外彎する器形であるが、内彎するもの（365・367・369・370）、直線的なもの（362・368）も見られる。



第 26 図 鏡千人塚遺跡 S K 15 土壙墓出土土師質土器坏・皿実測図



第 27 図 鏡千人塚遺跡出土土師質土器杯・皿実測図

(371・372. S K 02、373・374. S K 05、375. S K 22、376・377. S B 02、378. 10 区)

S K 02・05・22 でも杯・皿が副葬されていた（第 27 図 371～375）。371・372 は S K 02、373・374 は S K 05、375 は S K 22 出土である。

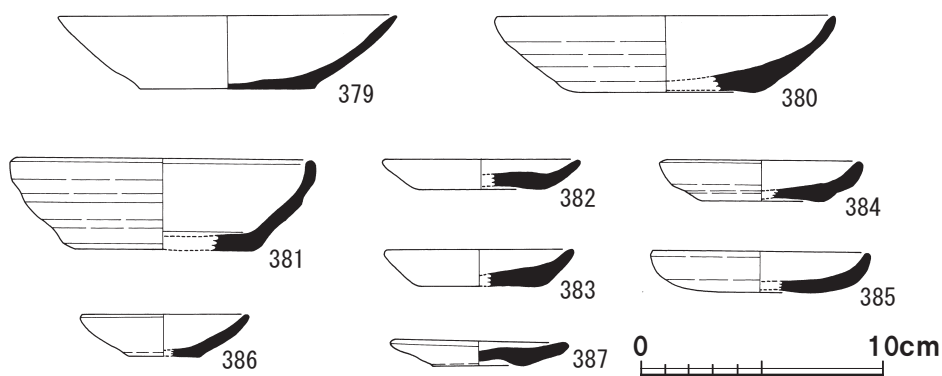
杯（第 27 図 371・373～375） 371 は口径 10.3cm で、口縁部は直線的で端部は面取りを行っている。373 は口径 11.1cm、器高 2.3cm で外面には凹凸が見られる。374 は口径 11.2cm、器高 2.8cm である。373・374 は底面に板ナデ調整が行われており、糸切り痕はほとんど観察できない。375 は口径 12.6cm、器高 3.5cm である。

皿（第 27 図 372） 口径 7.9cm、器高 1.6cm で、直線的に開き、器高は深い。

この他にも、S B 02、10 区で土師質土器が出土している（第 27 図 376～378）。376・377 は S B 28、378 は S K 04・17 が位置する 10 区出土である。376・377 は皿で、376 は体部～口縁部が口径 8.1cm、器高 1.6cm で、緩やかに外彎する。377 はやや大きく、口径 9.3cm、器高 2.1cm である。378 は杯の底部と思われ、底面には板目圧痕が見られる。

以上、鏡西谷遺跡ほか、鏡山南麓の 3 遺跡についてみてきたが、これらの遺跡が位置する農場地区は発掘調査に先立って全域の試掘調査（予備調査）が実施されている（植田 1982）。試掘調査では農場地区を第 1 地点～第 8 地点に分けて調査が実施され、第 4 地点と第 7 地点で土師質土器が出土した。第 4 地点が鏡東谷遺跡に、第 7 地点の北部一帯が鏡西谷遺跡に該当することから、補足として出土資料を紹介しておく。

第 7 地点では、鏡西谷遺跡 B 地区（第 28 図 379）、鏡西谷遺跡 C 地区（第 28 図 380～385）に相当する地点から土師質土器が出土した。379～381 は杯である。379・380 は口径 13.7cm 前後、器高 3.0cm 前後で、379 は直線的に開く器形で、体部はわずかに内彎する。器壁は薄い。380 は口縁部は内彎するが体部は直線的である。381 は口径 12.0cm、器高 3.7cm で、口縁部は内彎気味に立ち上がる。外面には回転ナデによる凹凸が明瞭に見られる。382～385 は皿で、382・383 は外方に開き、口縁端



第 28 図 鏡遺跡群第 4 地点・第 7 地点、清水奥山遺跡出土土師質土器坏・皿実測図
(379～385.鏡遺跡群第 7 地点、386.鏡遺跡群第 4 地点、387. 清水奥山遺跡)

部は先細りである。384 は内彎し、端部は丸く収め、底部が強いナデで窪んでいる。385 は手づくねで、口縁部のみ回転ナデ、底面はナデ調整である。

第 4 地点では鏡東谷遺跡北地区と南地区の中間地点付近から土師質土器が出土している（第 28 図 386）。口径 6.8cm、器高 1.7cm で、直線的に外方へ開くが、底径がやや小さい。

IV. その他の遺跡

東広島キャンパスにおける土師質土器は、これまで説明してきた鏡西谷遺跡、鏡東谷遺跡、鏡千人塚遺跡の 3 遺跡を主体とするが、農場地区南西端部の清水奥山遺跡や鏡山城跡ががら地区でも出土している。これらの遺跡は上述の 3 遺跡と有機的な関連をもちながら形成されたものと想定される。また、農場地区の西側には、ががら山北～西山麓の低丘陵や湖成段丘面を中心に山中池南遺跡群が位置しており、山中池南遺跡第 1 地点、同第 2 地点、同第 6 地点などで土師質土器が出土している。

1) 清水奥山遺跡

ががら山南東麓から東に延びる標高 220～230 m の丘陵状平坦地（湖成段丘面）に立地する。古墓 2 基が検出され、第 2 号古墓上の角礫中より土師質土器皿が 1 点（第 28 図 387）出土した（新谷 1982）。口径 7.2cm で、あまり立ち上がらずに外側に大きく開く器形である。口縁端部は丸く収めている。二次焼成を受けており、ひずみが生じている。

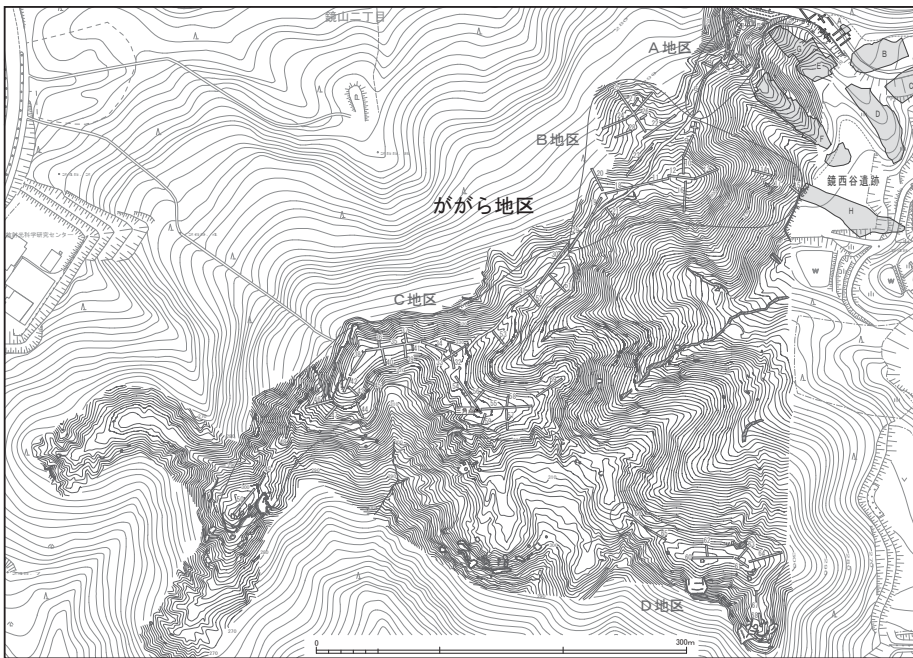
2) 鏡山城跡ががら地区

鏡山城跡は周防国山口に本拠を置く大内氏が安芸国支配の拠点として築城したもの

で、戦国時代前期の代表的山城である。広島大学農場地区の北側に隣接する鏡山に主要郭群が構築されているが、ががら山東麓に位置する鏡西谷遺跡 F 地区・H 地区の調査成果から、鏡山と地形的に連続するががら山（広島大学構内）にも関連遺構が存在する可能性を想定していた。2009～2012 年度にががら山の尾根部を中心に試掘調査が行われ、全域で郭群、堀切などの遺構が確認された（藤野・永田・石井・吉野編 2013）。出土遺物は多くはないが、土師質土器を中心に、青磁、瓦質土器、茶臼などが C 地区を中心に各地区で散発的に出土した。土師質土器は、A 地区、B 地区で土鍋、C 地区で皿、坏、土鍋、D 地区で羽釜が出土している。

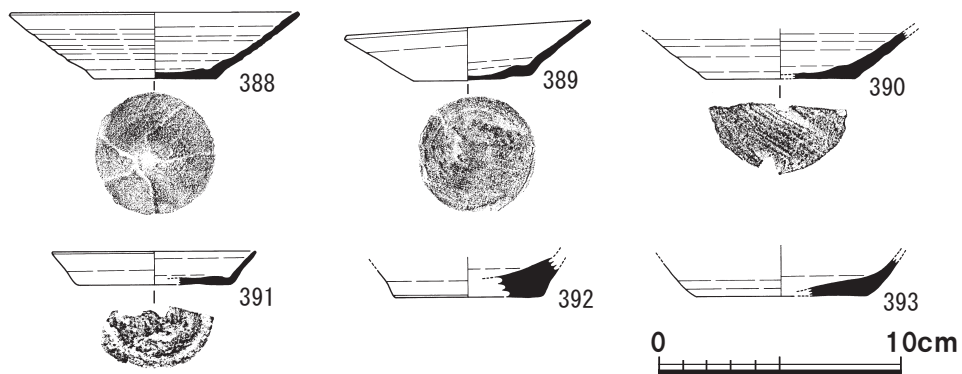
土師質土器皿・坏と思われる資料は 30 点近くあるが、ほとんど小片であり、器形の分かるものは少ない。C 地区第 1 郭 1 の段の土塁状遺構（第 30 図 392）、同第 1 郭 1 の段西の S A 01（第 30 図 388）、同第 1 郭 3 の段の S X 04 建物遺構南側の帯状平坦面（第 30 図 389～391）、同第 2 郭（第 30 図 393）などで出土した。

坏（第 30 図 388・390・392・393） 388 は口径 11.8cm である。直線的に開く器形で、口縁端部はやや強く押えられている。器壁が薄く、口縁部～体部は直線的で、底面に板目圧痕をもつ。392・393 は坏と思われる底部で、392 は厚手である。



第 29 図 鏡山城跡ががら地区調査区配置と鏡西谷遺跡位置

（藤野・永田・石井・吉野編 2013 より）



第30図 鏡山城跡ががら地区出土土師質土器杯・皿実測図

(388. C地区34区、389～391. C地区40区、392. C地区33区、393. C地区31区)

皿（第30図389・391） 389は口径9.8cmで、坏に近く、391は口径8.3cmである。いずれも器壁が薄く、体部～口縁部は直線的な形状で、底面に板目圧痕をもつ。

3) 山中池南遺跡第1地点

山中池南遺跡群は第1地点～第6地点の6遺跡からなり、標高331.1mのががら山北麓の低丘陵や山麓緩斜面などに位置する。第1地点・第2地点・第6地点で発掘調査が行われ、中世の遺構・遺物が検出されている（藤野編2005）。山中池第1地点はががら山から西へ派生する丘陵先端部から湖成段丘面へ移行する緩斜面に立地する。調査区の北側および南側には埋没谷があり、谷を隔てて北西に第2地点、南側に第6地点が位置している。中世の遺構は、鍛冶炉跡1基（SX01）、炭窯跡1基（SX02）、溝状遺構2条（SD01・02）、土坑12基（SK08～19）が検出された（藤野・楨林2005）。土師質土器はC6区北東部で出土しており、SD02の西側隣接地点である。

土師質土器は4点出土した（第32図394～397）。いずれも小破片である。394・395は坏の口縁部で、外彎して先端は先細りである。同一個体の可能性もある。396は坏の底部である。397は小片で、器種は不明である。

4) 山中池南遺跡 第2地点

山中池南遺跡第2地点はががら山北裾に位置し、ががら山から北側に延びる低丘陵平坦部、丘陵斜面、丘陵裾の低地部など広範囲に遺構・遺物が分布している。発掘調査は丘陵南斜面およびそれに隣接する低地部について行っている（藤野・楨林2005）。中世の遺構は調査区西端部のB10区、調査区南部のD11区および周辺で集中的に検出されているが、性格不明の土坑、溝などである。中世の遺物は土師質土器を

主体に、瓦器が出土した。遺構の集中する B10 区～ D11 区と遺構から少し離れた E9・10 区、F9・10 区、G10 区に集中して分布しており、低地部を中心としている。土師質土器は小破片を主としており、器形の分かるものは坏を主体としている（第 32 図 398～415）。

坏（第 32 図 398～405） 398 は体部は内彎し口縁端部がやや強く押えられており、断面方形状である。399 は底部に丸みをもち、器高が約 4cm と他のものより深い。400・401 は口縁部～体部で、丸みが強い。400 は口縁部が内彎している。402・403 は底部から直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外彎する。器高は 3cm 前後である。404・405 も坏と思われる底部であるが、薄手である。

皿または坏（第 32 図 406・407） 406 は底部が薄く、407 は厚い。

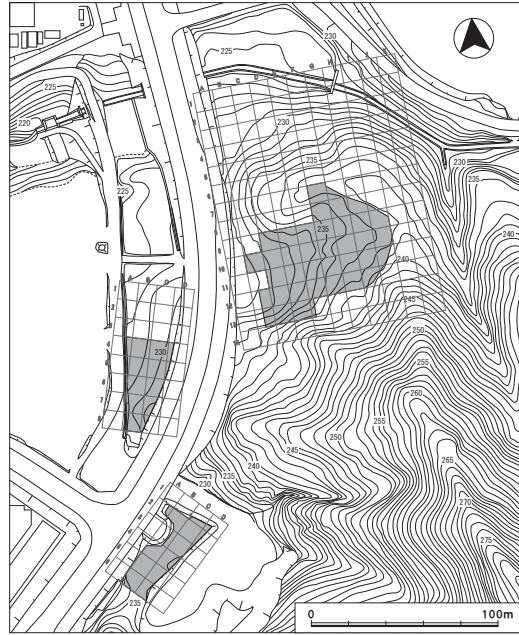
低丘陵の北側低地部（湖成段丘面）でも試掘調査で、切岸、溝などの中世遺構を確認しており、土師質土器を主体とする遺物が出土している（藤野 1992）。土師質土器は坏・皿を主体とする（第 32 図 408～415）。

坏（第 32 図 408～413） 408 は口縁部と体部の境が屈曲し、口縁部はわずかに外彎する。409 は直線的な体部をもつ。口縁部を欠くが、器高は高い。410～413 は坏と思われる底部である。410 は厚手の底部で、外面はナデ調整によって外彎している。411 は体部と底部の接合痕が明瞭に観察でき、二次焼成を受けているようである。

皿（第 32 図 414・415） 414 は外彎する器形で、415 は小破片である。

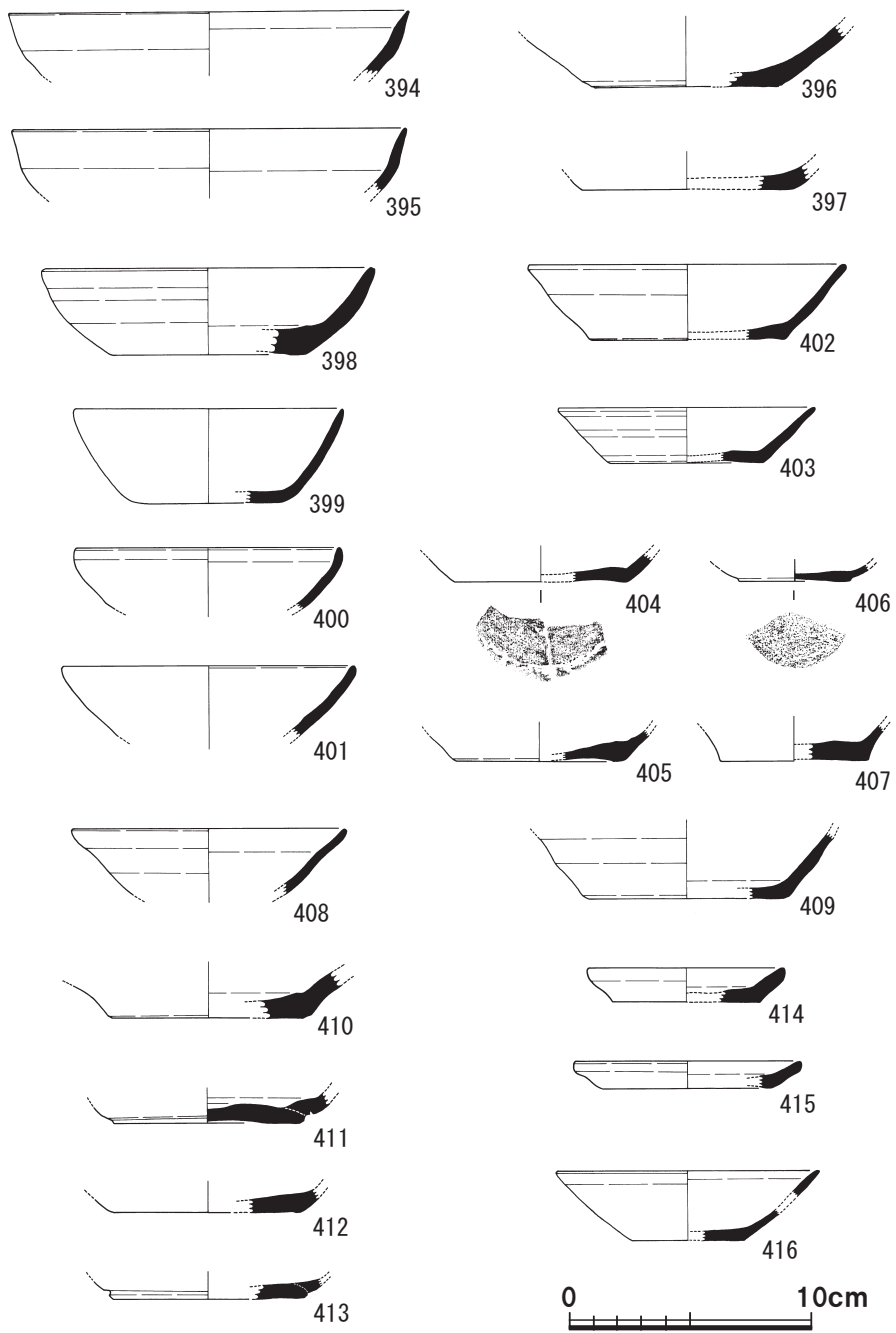
5) 山中池南遺跡第 6 地点

ががら山西麓に位置し、丘陵急斜面から湖成段丘面に移行する傾斜変換点に当たり、極めて緩やかな斜面に立地している。中世の遺構は検出されていないが、土師質土器が 1 点出土した（第 32 図 416）。口径 10.4cm、底径 5.8cm、器高 2.6cm の坏である。



第 31 図 山中池南遺跡第 1 地点・第 2 地点・第 6 地点の位置と調査区

（北西側が第 1 地点、北東側が第 2 地点、南東側が第 6 地点である。各地区の灰色部分が調査範囲を示している。）



第32図 山中池南遺跡第1地点・第2地点・第6地点出土土師質土器杯・皿実測図
 (395～397.第1地点、398～407.第2地点(発掘区)、408～415.第2地点(試掘区)、416.第6地点)

薄手の作りで、直線的に開く。

註

- (1) 出土資料についてはできるだけ図化し収録するように努めたが、小破片が多く、全体の約2割を資料化した。
- (2) 点数は破片数を示している。ただし、接合したものは接合した状態で1点としてカウントしている。したがって、接合した結果、完形、あるいはほぼ完形となったものも小破片も同じ1点である。
- (3) ここでは器高を基準として、2.5cm以上を坏、2.5cm未満を皿として説明する。
- (4) 出土土師質土器のうち166点を図化した。そのうち、SB 01出土資料は158点である。
- (5) 出土資料の主体は皿であり、図化していない破片も大半は皿と思われるものである。
- (6) 報告書（藤野・増田2003）ではSS 02として報告したが、今回改めて遺物の注記、遺物カードなどを元に出土位置を検討したところ、SB 03に伴う可能性が高くなった。その他の土師質土器についても同様の検討を行い、第19図281（報告書第97図1）はSS 02に伴う可能性が高くなった。周辺出土の土師質土器や遺構の構築順序からも瓦器をSB 03、281をSS 02に伴う遺物と考えても矛盾がないことから、これらの遺物の出土遺構について、ここで修正しておきたい。
- (7) 遺構番号については藤野2012を踏襲している。

3. 鏡遺跡群を中心とする土師質土器坏・皿の形態と製作技術の特徴

広島大学東広島キャンパス出土の土師質土器坏・皿は、口縁部の形状や体部形状などに形態差があり、器面整形・調整や底面調整等などについてもいくつかの類型を確認することができる。ここでは、土師質土器坏・皿の形態、調整および色調などについて分類を行い、各遺跡、各地区の様相をまとめておく。

1) 側面形態（側面観）

a) 体部・口縁部形状

坏の側面観は直線的なものや外彎するものなどがあるが、側面形状に大きく影響するのは体部の形状である。口縁部形状および体部下部～底部形状を個別に見ると、坏全体の側面観とは必ずしも一致しない。したがって、体部形状、口縁部形状の形態について分類し、側面形状（側面観）について検討する。

体部形状はⅠ～Ⅲ類の3種類に分類され、Ⅰ類は内彎するもの、Ⅱ類は直線的なもの（わずかに内彎するものを含む）、Ⅲ類は外彎するものである（第33図）。口縁部形状はi～iii類の3種類に分類され、i類は内彎するもの、ii類は直線的なもの、iii類は外彎するものである（第34図）。皿についても体部形状と口縁部形状の分析を行う。皿の側面形状は坏とはかなり異なるが、基本的な特徴はほぼ同じであり、坏の分類を利用する。口縁部形状は坏と同様である。

坏 基本的には体部形状と口縁部形状、体部下部～底部形状は連動するものが多い

が、体部形状が内彎し口縁部は直線的なもの（1・62・72⁽¹⁾ほか）や逆に口縁部が外彎するもの（65・228・395ほか）、体部形状は直線的に開き口縁部が内彎するもの（380）、体部から底部にかけてわずかに内彎するもの（76・229）なども認められる。

体部形状の分析対象資料は83点で、I類は40点、II類は41点、III類は6点が確認した。坏が出土していない清水奥山遺跡、基本的に小破片のみ



第33図 体部形状の形態分類模式図



第34図 口縁部形状の分類模式図

の鏡東谷遺跡を除くと、I類、II類はほとんどの遺跡で出土しているが、I類は鏡山城跡ががら地区では確認されていない。III類は鏡西谷遺跡B・D・H地区、鏡東谷遺跡北地区、鏡千人塚遺跡S K 15で各1点ずつ出土しており、遺跡や遺構に関連する状況ではない。

口縁部形状の分析対象資料は79点で、i類24点、ii類43点、iii類12点である。ii類を主体とし、ほとんどの遺跡で確認できるが、鏡西谷遺跡F地区はii類を欠き、i・iii類で構成される。i類は遺構を中心に出土している。iii類は鏡西谷遺跡B地区S K 01、同C地区S B 01、同F地区S S 02、鏡千人塚遺跡S K 15など遺構を中心に出土している。

皿 皿は体部と呼べる部分のごくわずかであり、器高が低いものでは口縁部と境がないため、口縁部形状が側面形状に強く影響する。体部形状分析対象は208点で、I類96点、II類45点、III類67点である。I類は鏡遺跡群（農場地区）のみで確認できる。II類は鏡西谷遺跡B・C地区の主要遺構、鏡千人塚遺跡S K 15から出土している。鏡山城跡ががら地区では確認できるのはII類のみである。III類は鏡西谷遺跡の各地区で出土し、鏡東谷遺跡、鏡千人塚遺跡、山中池南遺跡第2地点でも出土している。III類は鏡千人塚遺跡S K 15の主体をなし、鏡西谷遺跡F地区S K 02、山中南遺跡第2地点で確認できるはIII類のみである。

口縁部形状分析対象資料は207点で、i類77点、ii類63点、iii類67点である。体部形状とほぼ同様の傾向にある。

b) 口縁端部形態







杯・皿は口縁部形状にかかわらず、端部はおおむね丸く収めるものが多いが、口縁端部の始末については面取り状の調整が認められるものなど数種類がある。杯・皿の口縁端部形態はA～B類の大きく3種類に分類される（第35図）。A類は丸く収めるもの、B類は端部を面取りするもの、C類は端部が尖り気味で、外面側が丸く膨らみを持ち、内面は平坦気味のものである。A類は3種類に細分され、A1類はほぼ同じ厚さとなるように丸く収めるもの、A2類は先端を膨らませながら丸く収めるもの、A3類は先細りで丸く収めるものである。B類は2種類に細分され、B1類は口縁端面取りするもの、B2類は口縁端部外側を面取りするものである。B1類は断面方形状で、B2は面取り部が底部に対してほぼ垂直となる。

杯 A1～A3類、B1類が確認できるが、その他の類型は存在しない。最も多いのはA類で、その中でもA1類がほとんどを占めている。次いでA3類が多く、A2類は少ない。B1類はわずかに見られるが、意識的な面取りと言えるものは鏡西谷遺跡C地区（86）とE地区（251）、鏡山城跡（ががら地区）（388）のみである。

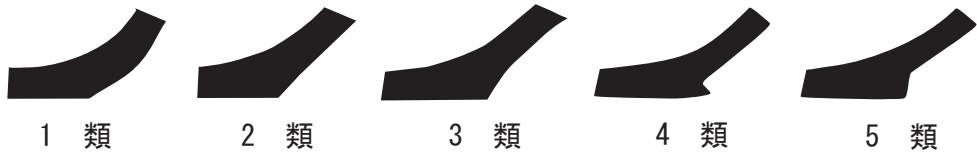
皿 全ての類型を認めることができる。最も多いのはA類で、その中でもA1類がほとんどを占めている。B1類は非常に少ないが、B2類は一定量が認められる。B2類は鏡西谷遺跡C地区SB01でまとまった量が出土し、その他A地区やF地区SK02からも出土している。B2類の形態は側面形状Ⅲ類に対応する。B2類の中には面の作り出しが弱いものもあるが、胎土が赤褐色を呈し、胎土に含まれる砂粒の大きさや色調などの状態などがほぼ同じ雰囲気であることから、垂直に面を作りだすことを意識した皿はB2類に分類した。B2類の皿は供給元が比較的狭い地域に限定される可能性がある。A類・C類では様々な色調・胎土のものが見られることは対照的である。C類はC地区SB01で一定量が出土している。

c) 底部側面形状

底部と体部の接合部分の調整と形状について見ると、大きく5類型を認めることができる（第36図）。1類は接地面際までナデ調整を行い、立ち上がり内彎するもので、2類は接地面際までナデ調整を行い、立ち上

A 類		
A 1 類	A 2 類	A 3 類
		
B 類		C 類
B 1 類	B 2 類	
		

第35図 口縁端部形状の分類模式図



第36図 底部側面形状の形態分類模式図

がりが直線的なものである。3類は接地面際までナデ調整を行い、外彎するもの、4類は底部の粘土板と体部の接合の際、接合作業やナデ調整が雑で段差や窪みができているもの、5類は底部・体部接合部付近の調整が粗く、底部粘土板が明瞭に観察でき、平高台状を呈するものである。観察を行った416点中、ある程度形状が分類可能であったのは354点である。その中では1・2・3類がほぼ同程度（100点前後）あり、4類は33点、5類は13点である。

d) 小 結

次の分析に進む前に、坏・皿の側面形態について、遺構出土の資料を中心にまとめておく。鏡西谷遺跡B地区SD 01周辺では坏体部形状Ⅱ類（以下、体部形状を略し、坏Ⅰ類、皿Ⅲ類のように表現する）(16)、皿Ⅰ類（24・26・29）、皿Ⅱ類（25・32・34・36）が認められる。坏Ⅱ類は口縁部形状（以下、口縁部と略す）ii類で、体部形状と連動した側面形態である。皿Ⅰ類は口縁部i類が主体で、口縁部iii類（26）が見られる。口縁端部形態（以下、口縁端部と略す）はA3類（22・24・29）およびA2類（26）である。皿Ⅱ類の口縁端部はA1類（25・36）、A3類（32）、C類（34）が認められる。36は内面側がやや押さえられている。皿Ⅰ・Ⅱ類ともにそれぞれの資料の法量や形態が多様である。SK 01およびその周辺では、坏Ⅰ類（17・21）、坏Ⅱ類（19・20・27）、皿Ⅰ類（22）、皿Ⅱ類（31・33）、皿Ⅲ類（35）が認められる。坏Ⅰ類は口縁部i類（21）、iii類（17）で、坏Ⅱ類はいずれもii類である。坏Ⅰ類iii類以外は体部形状に連動して口縁部が成形されている。皿Ⅰ類は口縁部i類、皿Ⅱ類はii類、皿Ⅲ類はiii類で、体部と口縁部が一体的に成形されている。また、皿Ⅱ類は底部側面形状も2類で、底部から直線的に成形されている。口縁端部は20（B2類）を除くと、いずれもA1・A3類を主とするA類であり、端部を丸く収めている。SD 01、SK 01を主体とするB地区北東部では出土数に比べて多様な形態・法量が見られると言えるが、坏はⅠ類・Ⅱ類で外彎するⅢ類は認められない。また、Ⅱ類も16以外は底部、口縁部を含む全体の側面形を見るとわずかに外膨らみである。

SX 02では坏Ⅱ類（47・48）、皿Ⅰ類（52）、皿Ⅱ類（50・51・54）、皿Ⅲ類（53）

がある。坏は口縁部および底部ともに直線的で形態的に共通している。皿はⅡ類のうち 51 は底部に対して口縁部が薄く、54 は底部に対して口縁部が厚いなど多様である。遺構周辺以外の出土量は少なく、形態に傾向性はない。また、唯一の坏Ⅲ類 (49) が南西部から出土している。

鏡西谷遺跡 C 地区 S B 01 では、坏Ⅰ類 (61～68・71～73・84・86)、坏Ⅱ類 (69・70・74～81・85)、皿Ⅰ類 (92～140・194～208・210～214)、皿Ⅱ類 (141～157・177・182・183・188・189・193・209)、皿Ⅲ類 (158～176・178～181・184～187・190～192) が認められる。坏Ⅰ類の口縁部はⅱ類が主体で、ⅰ類 (66・67)、ⅲ類 (65) も若干確認できる。口縁端部は京都系 (86) を除くとほとんど A 類で、B1 類がわずかに見られる。A 類は A1 類を主体に、A3 類が一定量ある。坏Ⅱ類も同様の傾向である。皿口縁部はⅰ類が約半数を占めるが、ⅱ類、ⅲ類もかなりの量出土している。口縁部形状は体部形状と基本的に一致し、一体的に成形されているが、Ⅰ類ではⅰ類を主としながらⅱ類が一定量あり、ⅲ類もわずかに認められる。また、Ⅱ類ではⅰ類が 5 例あり、Ⅰ類のⅲ類を含めて意図的な口縁部成形が行われている。口縁端部について見ると、皿Ⅰ類は A 類が主体で、C 類が一定量を占める。皿Ⅱ類は口縁端部 A 類 (141～157) を主として、B2 類 (177・182・183・188・189)、C 類 (193・209) が少量認められる。皿Ⅲ類は口縁形状 B2 類を主とし、B1 類が少量あり、A 類も一定数認められる。いずれの形態でも A 類は A1 類が主体で、A3 類が一定量を占めている。また、皿Ⅰ類では口縁端部 C 類が一定量認められ、鏡遺跡群の中では特徴的な様相である。全体の傾向まとめて見ると、坏はⅠ類・Ⅱ類がほぼ同数あり、Ⅲ類は認められない。Ⅱ類にもわずかに外膨らみする形態が多く、全体の側面形は内彎気味の形態が主体である。口縁部はⅱ類を主体とし、口縁端部は A1 類を主体としながら先細りの A3 類が一定量認められる。皿は口縁端部の形態を加味するとかなりの種類に分類することができ、多様な形態が共存している。上記の傾向性が大きく変更されることはないが、S B 01 からはここで提示した資料のほかに多量の皿片が出土していることから、今後さらに検討する必要がある。

D 地区 S K 06 では坏Ⅰ類 (227～229)、坏Ⅱ類 (230・231) で構成されている。S K 06 出土の坏はいずれも底部からの立ち上がり部分を幅広く、強めにナデ調整することで外彎する形態 (底部形状 3 類) となっていることが特徴的である。S K 07 は坏Ⅰ類 (232)、Ⅱ類 (233) が 1 点ずつ出土しており、丸味をもって立ち上がる点は形態的に類似している。

鏡千人塚遺跡 S K 15 では、坏 I 類 (344・345)、坏 II 類 (342・343・346・347)、皿 I 類 (365・367・369・370)、皿 II 類 (362・368)、皿 III 類 (349～361・363・364・366) で構成される。坏は II 類を主体に I 類が加わる構成であるが、口縁部、口縁端部の形状を加味すると、点数が少ない割に個体差が大きい。全体の側面形状はわずかに外膨らみの傾向を認めることができるものの直線的要素が強くなっている。皿は皿 III 類が主体で、I 類、II 類が少量伴う。皿 III 類には底部形状 3 類および 1 類があるが、1 類は 4 点 (358・361・363・366) と少ない。皿 I 類 3 点のうち 2 点 (365・367) は口縁部 iii 類であり、皿は側面形状が外彎する形態が主体である。

以上のように、鏡西谷遺跡 B 地区 S X 01 周辺、C 地区 S B 01 では坏 I・II 類で構成され、口縁部を特別意識せず体部と一体的に成形しているものが多く、口縁端部は丸く収める A 類を基本とする。鏡西谷遺跡 B 地区 S K 01・S D 01 周辺、D 地区 S K 06・07 でも基本的に坏 I 類・II 類の組み合わせであるが、側面観における直線性が増しており、器壁の厚さ、法量などの点でも相違を指摘できる。鏡千人塚遺跡 S K 15 においても坏 I 類・II 類の組み合わせを基本とするが、側面観は直線的である。皿はいずれの遺構でもおおむね I～III 類で構成されており、多様な形態が認められる。しかし、鏡千人塚 S K 15 では皿 III 類が主体で、比較的形態的の斉一性が認められる。

2) 色 調

土師質土器の坏・皿の表面は胎土や焼成の状況によって様々な色調を呈するが、大きくは赤系、白系、黒系、茶系に分けることができる (付録 C D 参照)。具体的な色味は、赤系が赤褐色、白系は黄褐色～黄白色、茶系は黄褐色、黒系は暗褐色～茶褐色である⁽²⁾。対象資料 416 点のうち、半数近くの 190 点は赤系である。これらは元々の胎土が赤く発色しているものであるが、白い胎土である土器の表面に赤色塗彩を施した資料が 15 点確認された⁽³⁾。内訳は、鏡西谷遺跡 A 地区 2 点 (皿)、C 地区 4 点 (うち、S B 01 出土坏 1 点、皿 2 点で、残りは皿)、D 地区 6 点 (S K 06 出土坏 4 点、S K 07 出土坏 2 点)、E 地区で 2 点 (皿)、鏡山城跡ががら地区 1 点 (坏) である。次に多いのが白系で、143 点、茶系 41 点、黒系 25 点である。

土器の色調に対する意識を窺わせるものとして、鏡西谷遺跡 D 地区 S K 06 の供献土器配置がある。S K 06 では赤系坏 1 点、白系坏 4 点が出土した。白系は赤色塗彩され、隣接するに対し、赤系のみがやや離れて配されていた。また、皿の口縁端部 B 2 類は、鏡西谷遺跡 B 地区 S X 02 周辺、C 地区 S B 01、F 地区 S K 02 に出土がほぼ限定され、赤系のみである。このほかにも、鏡西谷遺跡 A 地区、鏡西谷遺跡 D 地区 S K 07、鏡

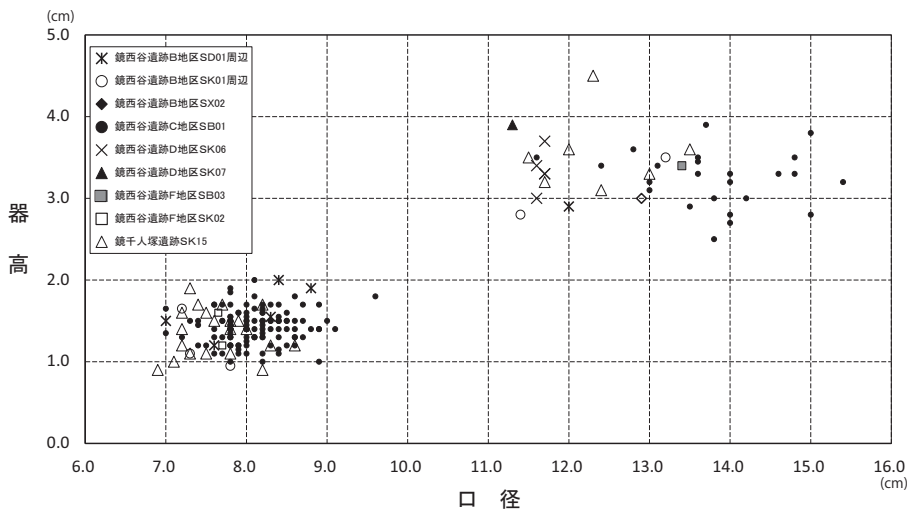
西谷遺跡E地区などから赤色塗彩土器が出土している。赤色塗彩土師質土器は出土点数は少ないものの、白系を主に赤く塗っており、特定の意図の存在を読み取ることができよう。

西条盆地で類例を探ると、東広島市溝口4号遺跡（吉野編 2010）をあげることができる。溝口4号遺跡土坑墓No.1024では、副葬品として短刀一振りとともに、土師質土器白系皿1点、黒系皿2点が出土した。出土状態は、まず黒系皿を置き、その上に白系皿、そして白系杯を重ね、黒・白・白・黒という順番を意識したものと思われるが、そのもつ意味は不明である。いずれにせよ、現状では、土師質土器の色に対する意識の存在を指摘することは可能であるが、出土状態や器形などと関連づけながら使用法や意味づけなどについて分析を進めることは困難な状況にあり、さらに検討を続けたい。

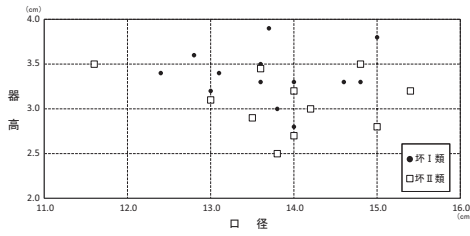
3) 法量

最初に、東広島キャンパス出土の土師質土器杯・皿のうち、遺構出土の資料を中心に法量について検討する（第37図）。口径、器高の確実な資料をもとにすると、杯は口径11.3～16.0cm、器高2.5～4.5cm、皿は口径6.9～9.6cm、器高0.9～2.0cmの範囲に分布する。少なくとも東広島キャンパスの遺構出土土師質土器は両者の間には法量的に明瞭な差異があり、視覚的に分類が可能である。

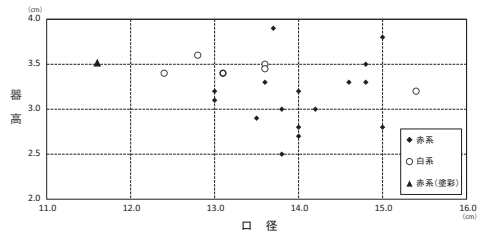
遺跡別、遺構別に見ると、杯については一定の資料数があるのは鏡西谷遺跡C地区SB01のみであり、一括資料として検討できるのは、鏡西谷遺跡D地区SK06（5



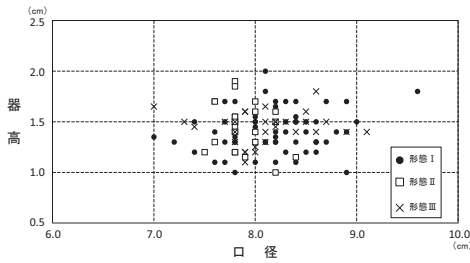
第37図 広島大学東広島キャンパス中世遺跡主要遺構出土土師質土器法量分布図



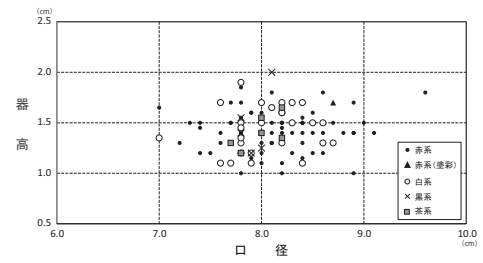
第 38 图 鏡西谷遺跡 S B 01 出土土師質
土器坯体部形態別法量分布图



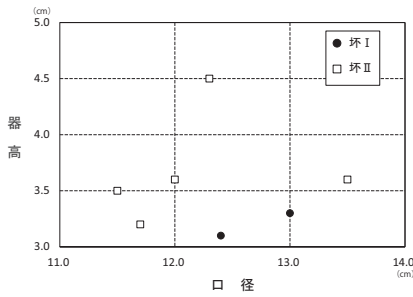
第 39 图 鏡西谷遺跡 S B 01 出土土師質
土器坯色調別法量分布图



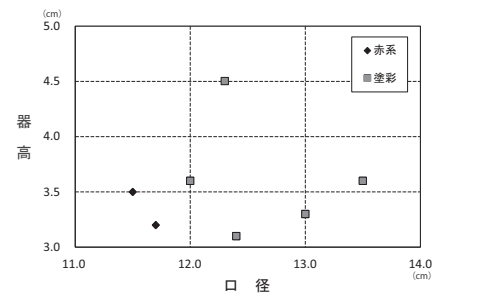
第 40 图 鏡西谷遺跡 S B 01 出土土師質
土器皿体部形態別法量分布图



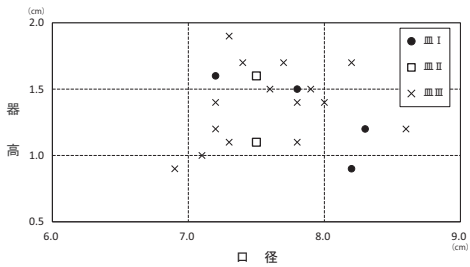
第 41 图 鏡西谷遺跡 S B 01 出土土師質
土器皿色調別法量分布图



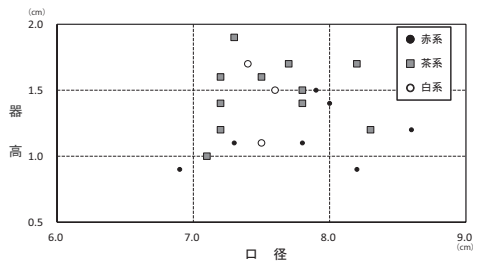
第 42 图 鏡千人塚遺跡 S K 15 出土土師質
土器坯体部形態別法量分布图



第 43 图 鏡千人塚遺跡 S K 15 出土土師質
土器坯色調別法量分布图



第 44 图 鏡千人塚遺跡 S K 15 出土土師質
土器皿体部形態別法量分布图



第 45 图 鏡千人塚遺跡 S K 15 出土土師質
土器皿色調別法量分布图

点)、鏡千人塚遺跡 S K 15 (7点)がある。鏡西谷遺跡 C 地区 S B 01 では口径 11.6 ~ 16.0cm、器高 2.5 ~ 3.9cm で、法量的にはかなり広範囲な分布である。しかし、口径は 13.0 ~ 15.0cm に分布の中心がある。また、器高 2.5 ~ 3.0cm の坏は口径 13.0cm 前後に集中しており、いくつかの法量の坏が重複して連続的な分布を示している可能性がある。鏡千人塚遺跡 S K 15 では口径 11.5 ~ 13.5cm、器高 3.1 ~ 4.5cm であり、鏡西谷遺跡 C 地区 S B 01 に比較すると、かなり小型である。器高は 4.5cm の 1 点を除くと、3.1 ~ 3.6cm で、3.3cm 前後に収斂しており、鏡西谷遺跡 C 地区 S B 01 とは対照的である。鏡西谷遺跡 D 地区 S K 06 は口径 11.6 ~ 11.7cm、器高 3.0 ~ 3.7cm である。1 点のみ器高 3.7cm とやや深いのが、その他は 3.0 ~ 3.4cm できわめて規格性が高い。補足的にその他の遺構出土の資料を見てみると、鏡西谷遺跡 B 地区 S K 01 周辺では、口径 11.4 ~ 13.5cm、器高 2.8 ~ 3.5cm、S X 02 周辺は口径 12.9 ~ 13.5cm、器高 3.0cm である。鏡西谷遺跡 D 地区 S K 07 は口径 11.5cm 程度、器高 4cm 程度で、D 地区 S K 06 とほぼ同じ大きさであるが、器高がさらに深い。F 地区では S B 03 が口径 13.4cm、器高 3.4cm、S S 02 は口径 11.8cm、器高 4.3cm であり、後者は D 地区 S K 07 の様相に近い。

以上のように、坏について見ると、鏡西谷遺跡 C 地区 S B 01 は幅広い法量の個体を含むが、相対的にやや大型であるのに対し、鏡西谷遺跡 B 地区 S K 01 周辺、同 D 地区 S K 06・07、同 F 地区 S S 02、鏡千人塚 S K 15 はひとまわり小型である。後者は鏡千人塚遺跡 S K 15、鏡西谷遺跡 B 地区 S K 01 周辺のように口径は 2cm 程度の大小を許容しながら、器高が 3.0 ~ 3.5cm 程度にまとまるものと鏡西谷遺跡 D 地区 S K 06・07、同 F 地区 S S 02 のように口径 11.5cm 前後の小型に収斂するものがある。

皿は一定数があるのは鏡西谷遺跡 C 地区 S B 01、鏡千人塚遺跡 S K 15 のみである。鏡西谷遺跡 C 地区 S B 01 では口径 7.0 ~ 9.6cm、器高 0.9 ~ 2.0cm である。大半の資料が収まる範囲で見ると、口径で約 2cm、器高で約 7mm の幅をもち、坏に比較すると規格性が高いと言える。鏡千人塚遺跡 S K 15 では口径 6.9 ~ 8.6cm、器高 0.9 ~ 1.9cm であり、鏡西谷遺跡 C 地区 S B 01 と類似した傾向にあるが、大半が口径 7.1 ~ 8.0cm に分布し、より小型であるとともに規格性が高い。このほか、鏡西谷遺跡 B 地区 S D 01 周辺、同 S K 01 周辺、同 S X 02 周辺、同 F 地区 S K 02 周辺で 10 点以下の検討可能な皿が出土している。鏡西谷遺跡 B 地区 S D 01 周辺、同 S K 01 周辺では、同 C 地区 S B 01 と鏡千人塚の中間的様相であり、鏡西谷遺跡 B 地区 S X 01 周辺、同 F 地区 S K 02 周辺では口径 7.5cm の小型で規格性の高い法量の皿が出土している。

次に遺構出土の土師質土器のうち、出土点数のまとまっている鏡西谷遺跡C地区S B 01と鏡千人塚遺跡の坏・皿について側面形状や色調と法量の関係を検討してみる。まず、鏡西谷遺跡C地区S B 01であるが、坏は口径12.4～16.0cm、器高2.7～3.6cmを中心に分布する(第38図)。法量を形態別に見ると、口径の分布では坏Ⅰ類に比べて坏Ⅱ類がより広い分布を示すが、分布の中心はおおむね一致している。器高では、坏Ⅰ類が3.3～3.5cm前後を中心とするのに対して坏Ⅱ類は3.0cm前後を中心としており、前者が相対的に深めである。色調と法量の関係を検討すると(第39図)、赤系は口径13.0～15.0cm、底径2.5～3.9cmの範囲に分布するのに対して、白系は1点⁽⁴⁾を除くと、口径12.4～13.6cm、器高3.4～3.6cmで、類似した法量に収まる。また、赤色塗彩坏について見ると、器高は赤系の分布範囲に収まるが、口径11.6cmとかなり小さい。通常の赤系と比較して、小型で深いという特徴を示す。

皿は口径7.2～9.1cm、器高1.0～1.8cmを中心に分布する(第40図)。形態別で見ると、皿Ⅰ類がもっとも広い分布範囲を示すが、皿Ⅲ類もほぼ同様の範囲であり、両者が全体の分布範囲を形作っている。一方、皿Ⅱ類は器高ではⅠ・Ⅲ類と同様であるが、口径は7.5～8.4cmに分布する。とくに口径8.0cm前後に集中し、口径、器高とも5mm前後の範囲の中に多くの資料が集中し、規格性が高い。色調別では、赤系は全体の分布範囲と一致するが、白系は1点を除くと、口径が7.6～8.7cmに分布し、赤系と比較して規格性がある(第41図)。黒系は口径7.8～8.1cm、茶系は口径7.7～8.2cmで、狭い範囲に集中している。器高の面でも、黒系の1点を除き、黒系1.2～1.6cm、茶系1.2～1.7cmで、きわめて規格性が高いと言えよう。茶系はいずれも皿Ⅰ類で、口縁端部A1類・C類であり、色調、法量、形態に相関関係が認められる。黒系は側面形状と相関性はないが、口縁端部は、茶系同様、A1類・C類である。

次に鏡千人塚遺跡SK15であるが、坏は口径11.5～13.5cm、器高3.1～3.6cmを中心に分布する(第42図)。形態は坏Ⅱ類を中心に、Ⅰ類が認められるが、分析できる資料が少ない。口径は、坏Ⅰ類が12.4cm、13.0cmであるのに対し、坏Ⅱ類は1点を除き12.0cm前後とやや小さく、器高では、1点を除き、坏Ⅱ類が3.4cm前後であるのに対して、坏Ⅰ類は3.2cm前後とやや浅い傾向があると言えるかもしれない。色調は胎土がすべて白系で、塗彩が施されおり、基本的に茶系仕上げである。坏7点のうち2点(347・348)は二次焼成を受けている。347は内面、348は内外面に火はねを起こしており、とくに347は著しい。また、両者とも橙褐色～赤褐色の部分が広範に認められる。348では胎土も赤変している部分があることから受熱の影響かもしれない。

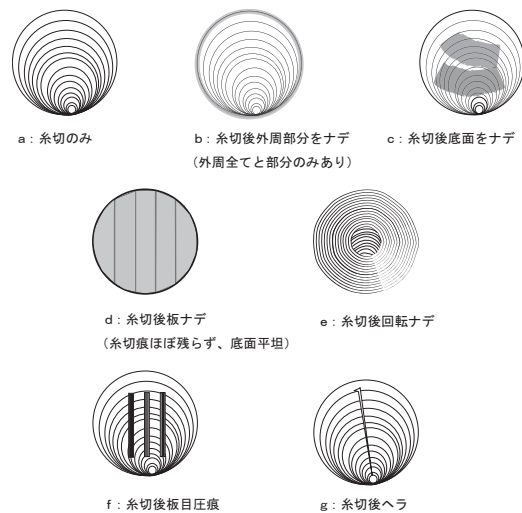
いが、247・248 は口径 11.5cm 前後と小型であり、赤色塗彩の可能性もある。

皿は口径 7.2～8.0cm、器高 1.1～1.7cm を中心に分布する（第 44 図）。形態は皿Ⅲ類を主体とし、皿Ⅰ・Ⅱ類が少量伴う構成である。皿Ⅲ類は全体の傾向に一致し、皿Ⅰ類も同様である。皿Ⅱ類はわずか 2 点であるが、口径 7.5cm、器高 1.1～1.6cm でほぼ同じ法量である。色調は、赤系、白系で構成され、白系を主体に、赤系が一定量伴う。口径について見ると、白系ではおおむね 7.0～8.0cm の間に収まるが、赤系はとくに傾向性を指摘できない（第 45 図）。一方、器高では赤系が 0.9cm～1.5cm に分布し、白系に比較すると低い器高に集中している。規格性の点ではややまとまりを欠くが、一定の規格に基づいていることは想定できる。現状では色調、形態と法量の間に相関性を明確に指摘できる状況では必ずしもないが、色調、形態ごとで法量がある程度異なる様相は生産者の違いを示している可能性もあり、今後さらに検討を続けたい。

3) 調整

出土土師質土器杯・皿は、京都系を除くと、器面調整は内外面ともすべて回転ナデ調整によって仕上げている。外面は杯・皿ともに凹凸が見られるもの（1・62・63・64・227・228・342・343 など）と平滑なものがある。内面側では見込み部分に回転ナデによる凹凸が見られるもの（16・19 など）がある。77・88 のように回転ナデ痕が渦巻き状に残るものもある。また、最終仕上げに見込みをさっと拭いたものがあり（拭き取り痕）、主に鏡西谷遺跡 B 地区、C 地区出土資料に多く見られた。

底部の切り離しは、確認できるものはすべて回転糸切である。回転糸切による底部切り離し後、未調整のものが大半であるが、何らかの調整を行っているものが一定量認められた。底面に見られた痕跡は、未調整のものを含め、a～g 類の 7 種類に分類できる（第 46 図）。a 類は糸切痕のみ、b 類は糸切後に外周にナデ調整を施すもの、c 類は糸切後に底面にナデ調整を施すもの、d 類は糸



第 46 図 底面調整の分類模式図

切り後に板ナデを施すもの、e類は糸切後に回転ナデを施すもの、f類は糸切後についた板目圧痕が見られるもの、g類は糸切後のヘラ痕が見られるものである。このうち、最も多いのは糸切後何も行われぬものであるが、板目圧痕をもつもの、底面外周および中心部分をナデ調整するものが一定数認められる。今回観察を行った資料の約1/3に外周もしくは底面中心付近にナデ調整を施すものが確認された。外周のみ、中心部のみだけでなく、両方の部分にナデ調整を施すものもあり、また底面の全体にナデ調整が及ぶものと一部分のみのものもある。ヘラ痕が見られるもの(87)、糸切後に回転ナデを施すもの(160)はそれぞれ1点のみである。板ナデ調整を施すものも非常に少ない(242・319・336・374・391)。板ナデ調整が残るものはすべて破片で、底面全体に行われたかどうかは不明である。

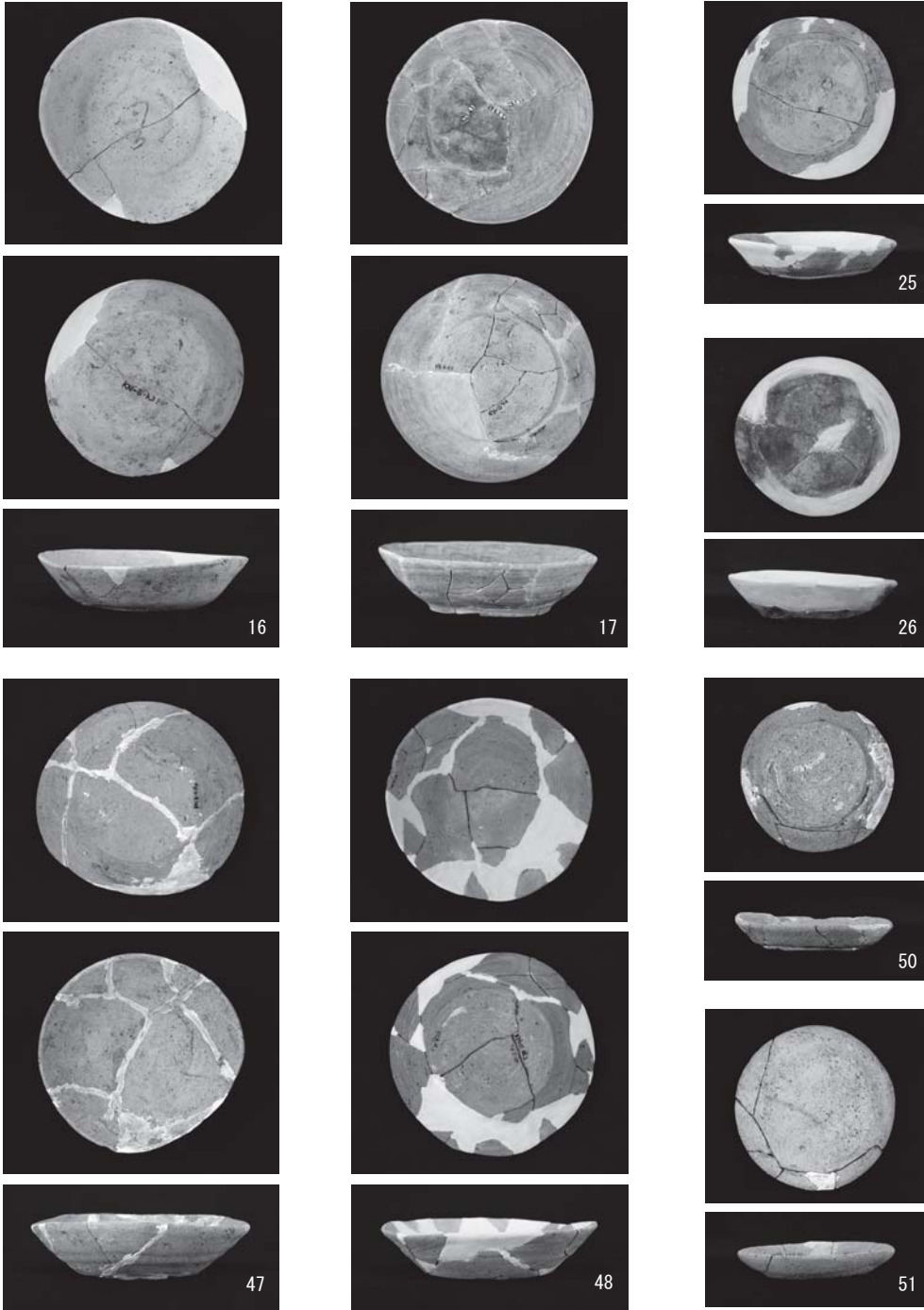
なお、糸切後ではないが、京都系の土師質土器は底面に板ナデ調整を行っている。板目圧痕については、乾燥時についたものであると考えられ、調整痕ではないと思われる。板目圧痕には複数の条線がはっきりと残るもの(37・89・224など)と、浅い線が残るのみのものがある。

底面調整b類のうち、半数以上が坏・皿底部形状1類で確認できるものである。底部外周にナデ調整を施すことにより、結果的に丸身をもった資料も存在すると考えられる。底面にナデ調整を施しながらも底部と体部の境に段差が残るものも多く見られる(113・119・152など)、また粘土塊が底面に張り付いているものもわずかながら見受けられる。345は糸切後に付いた粘土塊をなでつけているが、平滑になっていない。底部形状4類は糸切後も基本的に調整を行わず、5類についても、外面のナデ調整が不十分である。また、底面に指頭圧痕が見られるものがあるが、ユビオサエによるものではなく、あくまでもナデ調整等の際についたものが偶然残されたものであり、調整痕ではない。これらのことを総合すると、底部を切り離したのちに、底部外面付近や土器をひっくり返してナデ調整を行うといった行動はごく普通に行っているようであるが、それにもかかわらず底面を整える意識は高くはないと言えよう。

註

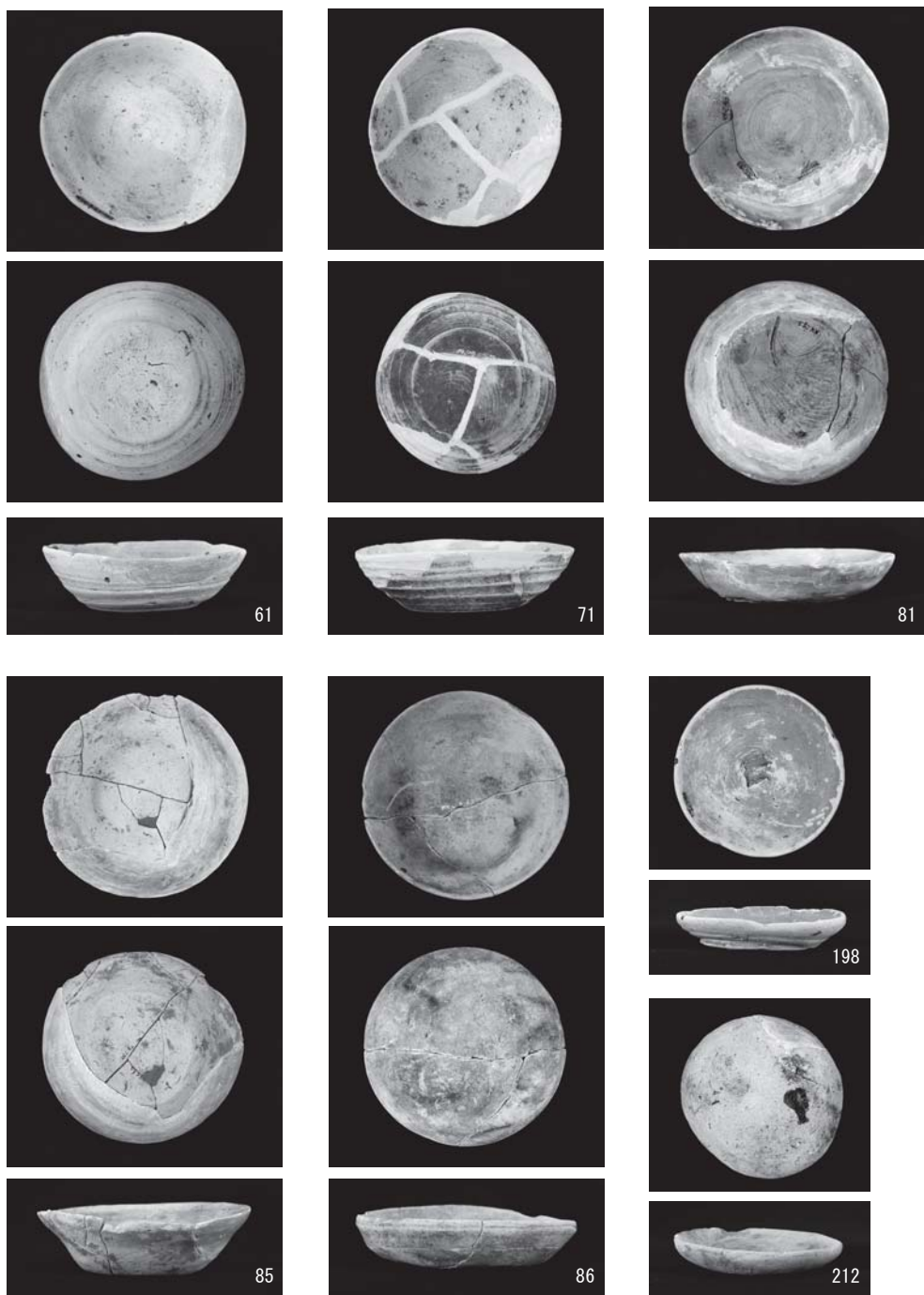
- (1) 前節で説明した各遺跡出土の土師質土器坏・皿の挿図中の番号を示す。以下、同様。
- (2) 茶系と白系の色調は類似するが、茶系は白系と比べて黄色みが強く、ここでは区別して扱う。
- (3) 確実な資料のみの点数であり、実数はさらに多いと思われる。
- (4) 1点のみ口径が大きいものがあるが(第9図79)、残存が少ない資料のため、本来の口径はもっと小さくなるのかもしれない。

図版1 鏡西谷跡B地区出土の土師質土器坏・皿



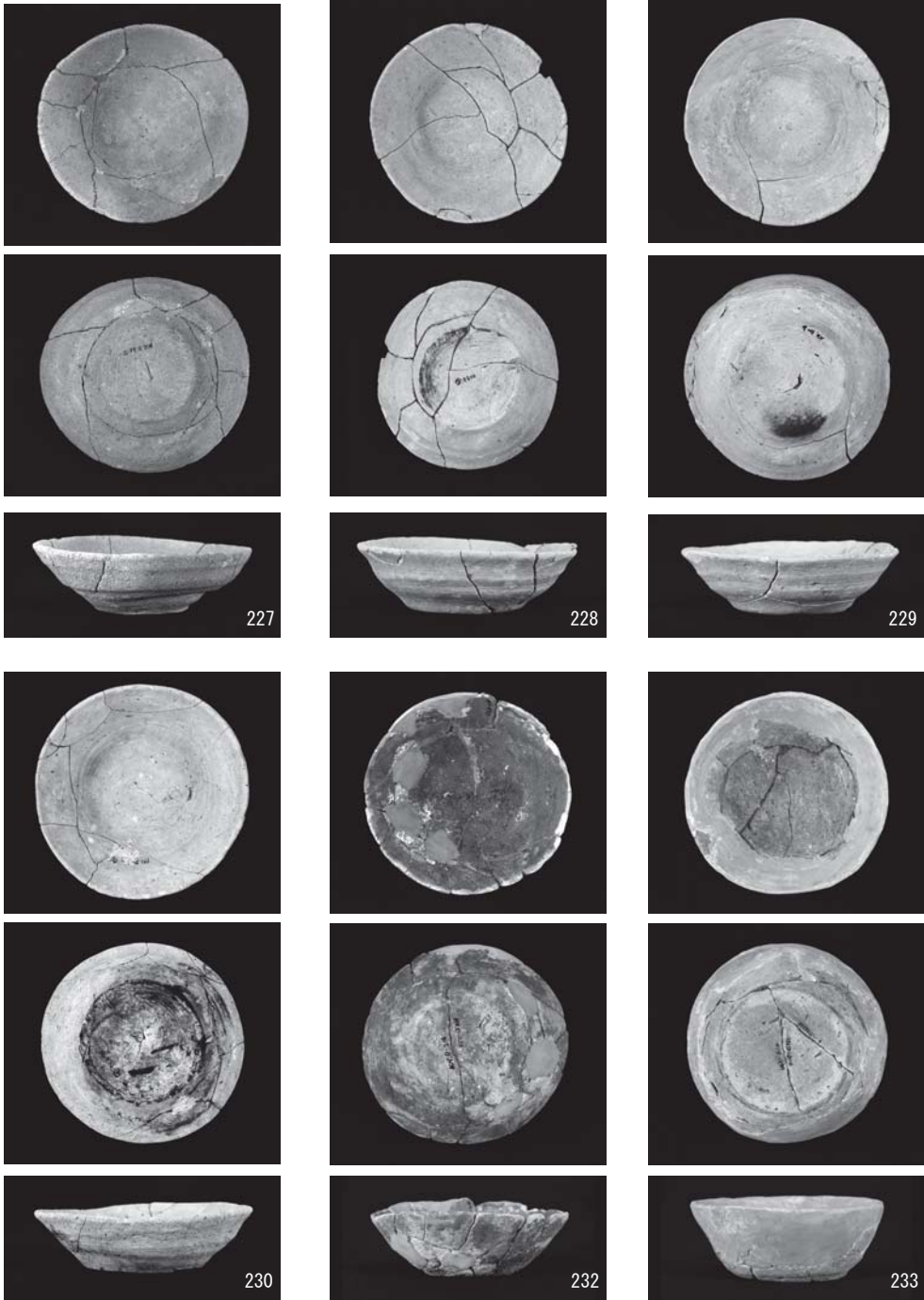
(16・17・25・26はS D 01周辺出土、47・48・50・51はS X 02周辺出土。番号は第6・7図に一致する。)

図版 2 鏡西谷跡C地区S B 01 出土の土師質土器坏・皿



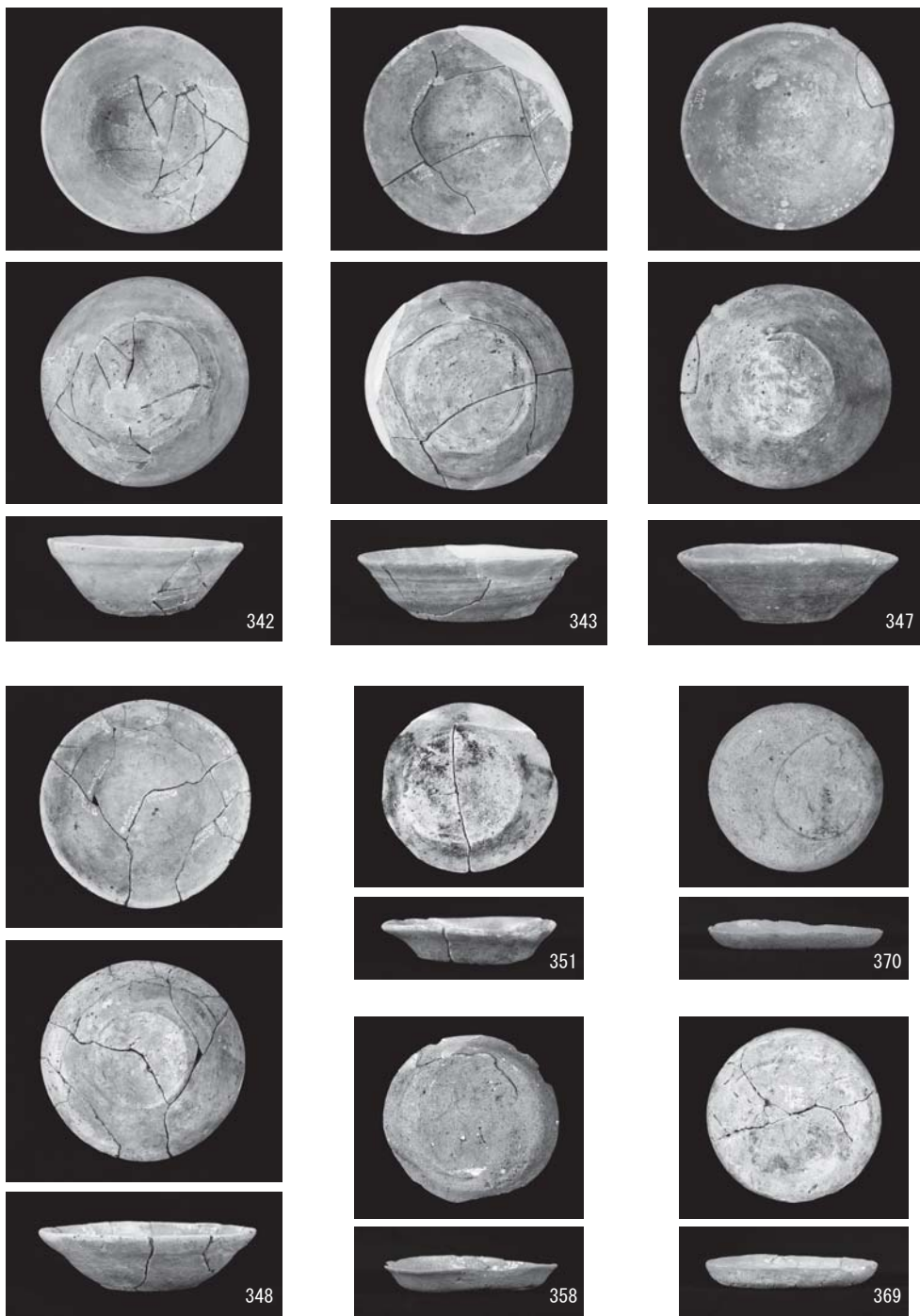
(すべてS B 01 出土。番号は第9・10・12図に一致する。)

図版3 鏡西谷遺跡D地区出土の土師質土器坏・皿



(227～230はS K 06出土、232・233はS K 07出土。番号は第15図に一致する。)

図版4 鏡千人塚跡出土S K 15の土師質土器杯・皿



(すべてS K 15 出土。番号は第 26 図に一致する。)